

津阪東陽『杜律詳解』 訳注稿 (六)

二宮俊博

本稿には、津阪東陽『杜律詳解』巻上の「野老」詩から「望野」詩までを収める。原文の「メ」は「シテ」に、「」は「コト」に、「仄」は「トモ」にそれぞれ改めた。明らかに訓点脱落していると思われる箇所には、これを補った。また詩句の左傍にとりどころ附されている和訓は、※をつけて改行して示した。書き下し文は、紙幅の都合で省略する。なお、詩題の上には便宜的に通し番号を施した。

- 031 野老
- 032 南鄰
- 033 和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄
- 034 客室
- 035 進艇
- 036 寄杜位
- 037 送韓十四江東省觀
- 038 所思
- 039 王十七侍御掄許携酒至草堂奉寄此詩便請邀高三十使君同到
- 040 望野

031 野老

此首徘徊^{シテ}門庭^ヲ、眺望^シ暮景^ヲ、觸^ル物^ニ感慨、咏^{シテ}興^ヲ自遣^ル。
直^ニ取^テ起頭^ノ二字^ヲ爲^レ題^ニ耳。^(注2)

(注1) 例えば、西晋・張載「七哀詩」其二「文選」卷二十三に「哀人は感傷し易きに、物に触れて悲心を増す」と。

(注2) 邵宝『集註』(卷二十二、宮室類)に「題、篇首の二字を取る」と。薛益『分類』(卷一、居室)も同じ。『集註』は宇都宮遯庵の詳説に挙げる。

この一首は、門庭を徘徊して、暮れなずむ景色を眺望し、景物に接して感慨をもよおし、胸中に湧き起こった思いを詠じて憂を晴らしたもので、そのまま初めの二字をとって題としたのだ。

野老籬前江岸廻^ル 柴門不正^{カラズ} 逐^テ江^ヲ開^ク

※廻…マガル 不正…スデカヒ 逐江…カハナリニ

野老^ハ公自謂也。廻^ハ言^ニ廻抱灣曲^ヲ。逐^ハ猶^レ隨^リ也。居倚^ニ灣曲^ニ、故門隨^ニ岸之斜^{ナルニ}、不^レ能^ニ正^{シテ}向^{シテ}而設^{コト}。卻^テ是^ニ一段ノ野趣。蓋公終日在^ニ几案^ニ、薄暮有^レ倦^{コト}、消^{シテ}搖^{シテ}於門^ニ、以暢^{シテ}幽情^ヲ、所^ニ以首敘^ス籬門之狀^也。此詩第四句、返照^ノ二字は一篇ノ樞軸。上二句、返照前ノ夕景、頗遣^テ興^ヲ自慰^ム。下四句、則返照後ノ暮色、遂^ニ感^{シテ}入^ル旅愁^ニ。若不^レ領^ニ此旨^ヲ、詩意不^ニ貫通^セ、一二尤爲^ニ支離^ト。讀者須

「詳」之ヲ。凡樞軸ノ語ハ、皆在「首」易見、此獨在「中間」。非「精」于詩「者」ニ交「臂」而失「之」。

（注3）邵宝『集註』に「野老は、公自らの謂なり」と。薛益『分類』も同じ。

「分類」は宇都宮遯庵の増広本に、「集註」は詳説に挙げる。また『唐詩貫珠』（卷三十六、幽居一）も同様の指摘。

（注4）『唐詩貫珠』に「廻は、廻抱灣曲。所以に柴門正向して開く能はざるなり」と。

（注5）『礼記』檀弓上に「孔子蚤に起き、手を負ひ杖を曳き、門に消搖す」と。

（注6）『莊子』田子方篇に「吾れ身を終ふるまで、汝と一臂を交へんとして之を失す。哀しまざる可けんや」と。

〈野老〉は、公自身の称。〈廻〉は、抱くようにぐるりと灣曲していることを言う。〈逐〉は、随とほぼ同義。住居は、灣曲に添っており、それゆえ〈門〉は〈岸〉が斜めになっているのに随って、真正面に向って設えることができないが、そこに却って格段の野趣がある。けれど公は終日几案を前にしていたのだろう、夕暮間近になつて倦み、〈門〉のあたりをぶらぶら散歩して、胸中深くひそめる思いをのびやかにさせた。冒頭、〈籬〉や〈門〉の様子を叙するゆえである。この詩は、第四句の〈返照〉の二字が一篇の樞軸である。上二句は〈返照〉前の夕景で、いささか憂晴らしをして自らを慰めている。下四句は〈返照〉後の暮色で、かくて心感じて旅愁にまで昂じてくる。もしこの趣意を領解しなければ、詩の意味は一貫して通せず、一二句はとりわけばらになつてしまふ。読者はこの点をはつきり知つておかねばならない。すべて樞軸となる語はどれも冒頭にあつて分かりやすいのだが、この詩だけは中間にあり、詩に精通した者でないと、みすみす見逃してしまふ。

漁人網ハ集「澄潭」下リ 賈客ノ船ハ隨「返照」來ル

此皆因「柴門」向「江」而見。潭ハ即「百花潭」。秋水如「鏡」、漁舟撒「網」ヲ、倚「門」ニ看「弄」シテ、聊亦娛「目」也。賈音估。隨ハ猶「逐」也。

（注7）輯註（卷七）に「潭は即ち百花潭」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。

なお、『唐詩貫珠』も同様の指摘。

これらはいずれも〈柴門〉が〈江〉に面していることから見えるもの。〈潭〉は、ほかならぬ百花潭。秋の水面は鏡のようで、漁舟は投網をうっている。〈門〉によりかかつて眺め、やはりいささか目を娛ませていたのである。〈賈〉、字音は估。〈隨〉は、逐とほぼ同義。長路關「心」悲「劒」閣「」 片雲何ノ意「傍」琴臺「」

※閑：カ、リテ

此因「倚」門「晚眺」スルミ、北望「劒閣」之天ヲ、又觸感シテ而愁起ル也。長路ハ自「蜀」還「洛」四千許里、路歷「劒閣」之險ヲ、所謂蜀道難之苦。故「悲」其不「易」歸也。劒閣ハ詳「于」前。琴臺ハ在「浣花谿」北ミ、司馬相如「故宅」。公思「郷」北望。偶有「二」片「暮雲」、懸「于」琴臺之前。因「感」シテ而尤「之」。雲ハ是「翩翾」自在、乃何「意」傍「臺」悠悠獨留「テ」而不「行」耶。若使「己」爲「二」片「雲」、則直「飛」而歸去、劒閣不「足」復悲「也」。雲本無心、偶傍「琴臺」、亦是等閑、果「有」何「意」。公在「天涯」、阻「于」兵戈、羈懷悵望、何「日」歸「歟」。故「無聊」之極、生「此」癡情「ヲ」。爾「與」王勃「人情」已厭「南中」之苦、鴻雁ハ那「從」北地「來」、同一懊惱。非「下」歴「三」倦遊「者」上、靡「以」語「此」耳。黃生云、前「暮」晚景「眞」是詩中「有」畫、後說「旅情」、幾「于」淚痕濕「紙」矣。

（注8）盛唐・李白の「蜀道難」（『古文真宝』前集）がよく知られている。

（注9）訳注稿(四)、024「別れを恨む」詩。

（注10）邵傳『集解』に「相如の琴台は、浣花谿の北に在り」と。前漢・司馬相如（字は長卿、前一七九？～前一八）については、『史記』卷一一七及び『漢書』卷五七に伝があり、杜甫に「琴台」と題する詩（詳註巻十）がある。

（注11）東晉・陶淵明の「歸去來の辞」（『文選』卷四十五／『古文真宝』後集）に「雲は無心にして岫を出、鳥は飛ぶことに倦んで帰るを知る」と。

（注12）等閑は唐代の口語。三浦梅園『詩敵』巻六に、「等閑ハ、ナラザリト訓ズ。何トモナキ意ナリ。尋常也ト注スレドモ、意少シカハリアルベシ。瀟湘ヨリ何事ソ等閑ニ帰、等閑ニ識得ス東風ノ面ノ類、不用意也」とする。な

お、塩見邦彦『唐詩口語の研究』は、清・劉淇『助辭弁略』巻三の「猶云尋常、輕易之辭也」というのを挙げて、「否定的なニュアンスを持つ語である」と指摘する。

(注13) 初唐・王勃(字は子安、六五〇～六七六?)の「蜀中九日」詩(『唐詩選』巻七)に、次のように見える。

九月九日望鄉臺 九月九日 望鄉台

他席他鄉送客杯

他席他鄉 客を送る杯

人情已厭南中苦

人情は已に南中の苦を厭ふに

鴻雁那從北地來

鴻雁^{なんぞ}北地^{より}來たる

*南中は、蜀(四川省)を指している。

(注14) 黄生、字は扶孟(一六二二～一六九六?)。その著『杜工部詩説』は全十二巻。康熙三十五年(一六九六)自序の同年刊本がある。その巻八に、

この詩を載せ「前半は景を写す、真に是れ詩中の画。後半は情を写す、則ち又た紙上の涙」というが、仇兆鰲の詳註(巻九)に「黄生曰く」として「前幅晚景を摸す。真に詩中に画有り。後半旅情を説く。涙痕紙を濕すに幾し」という。東陽は『唐宋詩醇』(巻十五)に引くのに拠つたものであろう。なお、「詩中画有り」は、北宋・蘇軾の「摩詰の藍田烟雨圖に書す」(『東坡題跋』巻五)に「摩詰の詩を味はふに、詩中に画有り。摩詰の画を観るに、画中に詩有り」とあるのに基づく。摩詰は、王維の字。

これは「門」にもたれて夕暮を眺めていることから、北のかたへ劍閣の空を望み、心に触れ感ずることがあつて愁いが湧き起つたのである。「長路」は、蜀より洛陽にもどる四千里ばかりの道程で、「劍閣」の險をへる、いわゆる「蜀道難」の苦しみである。さればその帰るのが容易でないのを悲しむのである。「劍閣」は、前に詳しく見える。「琴台」は、浣花溪の北にあり、司馬相如の故宅。公は故郷を思い北のほうを望んでいると、たまたまひとひらの夕暮れ雲が「琴台」の前にかかつており、それで心感じてこれを咎めている。「雲」はふわふわとどこへ行くとも自在であるのに、かえつて「何の意ぞ」(どういうつもりで)「へ台」に「傍」つて、のほほんと留まつたまま去つてゆかないのだろうか。もし自分が「片雲」であつたな

ら、すぐさま飛んで帰ろう、「劍閣」なんぞもはや悲しむに足りないのだから、と。「雲」は本来無心であり、たまたま「琴台」に「傍」つていただけのことで、やはりどうということはなく、はたして「何の意」があらう。公は天涯にあつて戦乱に阻まれ、旅愁のあまり故郷のほうを望んで、いつになったら帰れるのかと心痛めているのである。さればやるせなさか昂じたあげく、このようなたわけた感情を生じたのだ。王勃の「人情は已に南中の苦を厭ふ、鴻雁はなんぞ北地従り來たる」と全く同じ懊惱である。他郷での浮草暮しに倦み疲れた経験のない者は、こんな言葉を吐くことはないのだ。黄生が云う、「前半は暮れ方の景色をそのまま写し出して、まことに詩中に画がある。後半は旅上にある身の情懷を説いて、ほとんどもう涙の痕が紙を湿らさんばかりだ」。

王師末報收^ム東郡^ヲ 城闕秋生^{シテ}畫角哀^ム

※未報^{シラセズ} 收^{トリ}モドス 秋生^{シテ}アキニナリテ

東郡ハ謂^フ二京東^ノ諸郡^ヲ。去年九月、史思明復入^テ洛陽及濟汝鄭滑

四州^ヲ。今年六月、田神功破^ル二史明^ノ兵^ヲ於鄭州^ニ。然^{トモ}東京與^ニ諸郡

猶未^レ復^セ。洛陽ハ公故郷、故^ニ特^ニ悲^レ之^ヲ。城闕ハ謂^フ二成都^ノ城門^ヲ。

肅宗至德二年、以^ニ明皇^ノ行在^ニ。陞^ニ蜀郡^ヲ爲^ニ南京^ト、置^レ尹^ヲ比

二兩京^ニ。故^ニ得^レ稱^ニ。城闕^ハ。角^ハ一名^ノ時囉^ヲ。以^レ銅^ヲ作^レ之^ヲ。形

如^ニ竹筒^ノ、本細^{シテ}末大^{ナリ}、軍中警嚴之音。譙樓置^レ此^ニ。以^ニ司^ニ晨昏

。因^ニ中原再亂^ニ、蜀亦警備。城頭ノ角聲、朝暮貫^レ耳^ヲ。時及^ニ秋候

。聲尤悲哀。公既^ニ晚望傷^レ目^ヲ、不^レ勝^ニ羈懷之惡^ニ。乃當^ニ暮色慘

悽之際^ニ、而聞^ニ此斷腸之聲^ヲ。感慨益切、無^レ所^ニ遣^レ也。按^ニ只聞^レテ

音^ヲ而稱^ニ畫角^ト、因^ニ其清切^{ナルニ}、想像^{シテ}言^レ之^ヲ。太白誰家ノ玉笛暗

飛^レ聲^ヲ、亦是也。

(注15) 輯註に「蓋し東郡は京東の諸郡を謂ふ。滑州に非ざるなり」と。字都宮

遼庵の増広本にも引く。滑州(今の河南省滑県の東とするのは、薛益^ハ分

類」の説。

〔注16〕『集千家註』に引く南宋・黃鶴の注に「去年九月、史思明、洛陽及び済・

汝・鄭・滑四州を陥る。是の年六月、田神功、史明の兵を鄭州に破る。然れども東京と諸郡と猶ほ未だ復せず」と。済州は、今の山東省荏平県の西南。汝州は、河南省汝州市。鄭州は、河南省鄭州市。

〔注17〕訳注稿(四)、024「別れを恨む」詩の詳解に「公、曾祖以来、洛陽に居す。故に公、長安に生まると雖も、然れども常に洛陽を以て故郷と為す」と。

〔注18〕薛益『分類』に「至徳二年、玄宗成都に行在す。故に陞して南京と為す。公の自注に城闕と称することを得」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。但し、南京を誤って東京に作る。なお、至徳二年の年は載とすべきこと、訳注稿(五)、024「別れを恨む」詩の〔注1〕参照。

〔注19〕哮囉は、法螺。宇都宮遯庵の増広本には「角、文苑彙編に云ふ、蚩尤と玄甘〔女〕と戦ふ。帝始めて角を為り、命じて之を吹かしむ。龍鳴を作し之を禦がしむ。軍中に之を置いて以て昏曉を司どる。故に角を軍の楽と為す。長さ五尺、本細く末太し。或いは竹木を以てし、或いは皮を以て之を為す」という。『文苑彙編』は、明・孫承顔の編になる類書。全二十四卷。その巻十九、楽器部に見える。

〔注20〕李白（字は太白）の「春夜洛城に笛を聞く」詩（『唐詩選』巻七）に、次のように見える。

誰家玉笛暗飛聲 誰が家の玉笛 暗に声を飛ばす
散入春風滿洛城 散じ入りて春風洛城に満つ

此夜曲中聞折柳 此の夜 曲中 折柳を聞く
何人不起故園情 何人か故園の情を起さざらん

* 誰家は、だれの意。この詩については、『校注唐詩解釈辞典』（稲畑耕一郎執筆）参照。

〈東郡〉は、首都長安より東にある諸郡のこと。去年九月、史思明の軍が再び侵入して洛陽および済・汝・鄭・滑の四つの州を陥れた。今年六月、田神功が史明の兵を鄭州に破った。されど東京たる洛陽と諸郡とは今だに取り戻していない。洛陽は公の故郷であるので、それゆえことさら悲しむのである。〈城闕〉は、成都の城門。肅宗の至徳二年（七五七）、明皇（玄宗）が行幸されたことから、蜀郡を昇格させて南京とし、長官である尹を置いて長安・洛陽の両京に肩を

並べさせた。それゆえ〈城闕〉と称することができるようになった。

〈角〉は、一名哮囉。銅製で、竹筒のような形をし、本は細く末端は大きい。軍中で警戒する時の音。物見櫓にこれを置いて、朝晩鳴らした。中原が再び乱れたので、蜀でもやはり警戒して備えており、〈城〉頭の〈角〉声が朝な夕な耳を貫く。時候は〈秋〉に入り、その音色はことのほか悲哀に満ちている。公は日暮れがた眺望して心傷めており、羈旅の身のあしきにたえないのに、暮色惨憺たる時に、この腸を断ちきるような音色が聞こえてくると、感慨はますます切なく、どうにもやるせないのである。按ずるに、ただ音色を聞いただけで〈画角〉と称しているのは、その高く澄んだ切ない音色によって想像して言う。李太白の「誰が家の玉笛暗に声を飛ばす」も、やはり同様である。

032 南鄭

公往^ニ有^一過^ニ南鄭朱山人^一水亭^ニ詩^一。篇末^ニ云^一、看君^カ多^ク道氣^一、從

此數^レ追隨^{セン}。蓋亦雅士也。

〔注1〕顧宸「註解」に題下に「朱山人なり。公に〈南隣朱山人の水亭に過る〉詩有り」と注する。その詩（詳註巻九）は、次のごとくである。

相近竹參差 相近づけば竹參差

相過人不知 相過れども人知らず

幽花敬滿樹 幽花敬きて樹に満つ

細水曲通池 細水曲りて池に通ず

歸客邨非遠 歸客 村遠きに非ず

殘樽席更移 殘樽 席更に移す

看君多道氣 看る君が道氣多く

從此數追隨 此れ從り數し追隨せん

* 〈細水曲〉の三字、錢注（卷十二）及び輯註（卷十二）は〈小水細〉に作る。〈歸客〉は、杜甫をいう。〈道氣〉は、脱俗の氣象。

公には先に「南隣朱山人の水亭に過る」詩があり、その篇末に「看

る君が道気多く、此れ従り数しば追随せん」と云う。けだし、やはり高雅の士であろう。

錦里ノ先生鳥角巾 園收ニ芋栗ニ未ニ全貧^{(注2)(注3)}

※収：トリイレテ

浣花里ハ故ノ錦官城之地、亦號ス錦里^(注4)。朱山人ハ里中ノ耆老、故ニ稱シテ爲ニ錦里ノ先生ト。鳥角巾ハ隱士之服。南史ニ劉巖隱逸シテ不仕、常ニ著ニ緇衣小烏巾。以ニ錦ノ字ヲ串ニ合ニ烏ノ字ニ、以麗ニシテ句面マ、而觀ス未ニ全貧也。芋ハ蜀地ノ所宜、有ニ蜀芋之稱。有ニ君子芋、大サ如斗、見ニ廣志。栗亦山郷ノ所宜、疑クハ當地ノ名産。時蓋九月、芋栗皆收也。未ニ全貧ニ言貧而不貧。蓋山人雖貧、以レ收ニ芋栗ヲ、供給不^(注5)乏、是暫ク富也。

(注2) 〈芋栗〉の二字、錢注(卷九)は「芋栗」に作り、「一に栗に作る」と注す。また輯註(卷七)及び顧宸「註解」は「芋栗」に作り、輯註に「一に芋栗に作るは非」、註解に「今、誤つて芋栗に作る」とそれぞれ注す。宇都宮遯庵の詳説にも「芋栗ノ芋ノ字芋ニ作ルハ不可ナリ。芋ハトチ也。栗ハクリ也」という。これに対して、『唐詩貫珠』(卷十六、雅事一)は本文を「芋栗」とし、「按ずるに芋と栗とは蜀中の土産常物。或いは芋に注して橡子と為す者は非」という。詳註(卷九)もこれに同じで、「一に芋に作るは非」、「一に栗に作るは非」とする。

(注3) 〈未〉字、錢注および輯註は「不」に作り、輯註に「一に未に作る」と。(注4) 耆宿。長老。『礼記』曲礼上に「六十を耆と曰ひ、指使す。七十を老と曰ひ、伝す」と。

(注5) 『唐詩貫珠』に「鳥角巾は、隱士の服。錦字を以て鳥字に串合し、而して其の錦里に隱るを稱するのみ」と。

(注6) 顧宸「註解」に挙げるが、〈嚴〉を〈嚴〉に作る。但し、劉巖・劉巖のいづれにしろ、『南史』に見えない。『註解』は、宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注7) (注5)参照。

(注8) 『唐詩貫珠』に「按ずるに広志に、蜀漢に芋繁し。凡そ十四種。君子芋有り、大きな斗の如し。百菓芋、畝に百斛を収む。葉以て饒を養ふ」と。

『広志』は、晋・郭義恭撰。『藝文類聚』卷八十七、菓部下、芋の条および『太平御覽』卷九七五、菓部十二、芋の条に引く。

浣花里は、もとの錦官城の地で、〈錦里〉とも号した。朱山人は、その地の長老であるから、〈錦里の先生〉と称した。〈鳥角巾〉は、隱士の服装。『南史』に、「劉巖は隱逸して仕えず、いつも緇衣をまとい小さな黒い頭巾をかぶっていた」とある。〈錦〉の字で〈烏〉の字に配合して、句の字面をきらびやかにして、〈未だ全く貧ならず〉を際立たせている。〈芋〉は、蜀地に適したもので、蜀芋という言い方がある。そのなかに斗ほどの大きさの君子芋なるものがあつて、『広志』に見える。〈栗〉もやはり山郷に適したもので、どうやら当地の名産らしい。時はけだし九月で、〈芋〉〈栗〉どちらも収穫できるのである。〈未だ全く貧ならず〉は、貧しくとも(食うに困るほど)貧しくはないことを言う。けだし山人は〈貧〉しいとはいえず、〈芋〉や〈栗〉が収穫できたので、食べる物に乏しくはない。しばらくは富んでいるのである。

慣^レ看^ルニ賓客兒童喜、得^レ食^ラ階除鳥雀馴^ル

※慣看：ミナレタル 階除：ザシキノエンサキ 馴：ナツク

慣ハ熟也。賓客ハ公自謂也。公數ク過ニ其家ニ、故ニ兒童亦慣^レ見^ルニ而喜^ニ其至^ニ。蓋本言主人喜^ラ客、卻以ニ兒童之喜^ニ形^ニ出^ス其喜^ニ也。堂前庭曰階除。山人常ニ施食^ラ、馴禽遊^ニ階除^ニ。了ニ無驚猜^ニ。悠然忘^レ機^ヲ。尤見ニ野趣^ニ。不^ニ必^シ稱^ス其行^ニ。惠^ニ及^ニ於禽鳥^ニ也。

(注9) 顧宸「註解」に「本と山人の賓客を喜ぶを言ふ。却つて兒童の喜ぶを以て形出す」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

(注10) 何か拠るところあるのか、不明。

(注11) 顧宸「註解」に「階除鳥雀馴擾して去らず、正に〈但だ見る群鷗日來たる〉と同一の野趣」と。宇都宮遯庵の増広本に挙げる。なお、〈但だ見る〉云々は、後出034「客至」詩の第二句。

(注12) 『唐詩貫珠』に「四は其の仁を行ふこと禽鳥に及ぶを言ふ」と。

〈憤〉は、熟である。〈賓客〉は、公自身のこと。公はささいさいその家を訪れたので、それゆえ〈児童〉も見慣れて、やつてくるのを〈喜〉んでいる。けれど本来は主人が客を喜ぶことを言うのだが、かえって〈児童〉が〈喜〉ぶことで、その喜びをあらわしている。堂前の庭を〈除〉という。山人がいつも〈食〉べものを与え、人に〈馴〉れた鳥が〈階除〉に遊んで、驚いたり疑ったりする様子がない。のんびりとさかしらを忘れており、とりわけ野趣が見てとれる。必ずしも恵みを施すのが禽鳥にまで及んだというのではない。

秋水纔深四五尺 野航恰受兩三人

二語蟬聯而下、一片天機。纔深ハ水浅也。言秋水落テ僅ニ深コト四五尺^{ナラフ}、以生^{シテ}下ノ恰受^{注13}。公詩喜用受^{注13}、更ニ見^{注13}奇趣^{注13}。吹^{注13}面^{注13}受^{注13}和風^{注13}、輕燕受^{注13}風斜^{注13}、脩竹不^{注13}受^{注13}暑^{注13}、莫^{注13}受^{注13}二毛^{注13}侵^{注13}、而野航恰受^{注13}尤奇^{注13}。蓋山人迎^{注13}公、芋羹栗飯供畢^{注13}、因乘^{注13}秋水^{注13}、浮^{注13}小舟^{注13}、伴^{注13}二二^{注13}同好^{注13}而逍遙^{注13}也。

〔注13〕天機の語、『莊子』大宗師篇に見える。ここでは、技巧を弄さず自然のままであるのをいう。

〔注14〕顧宸『註解』に「此れ正に秋水落ち僅かに深きこと四五尺、以て下の恰も受くの句を生ずるのみ」と。

〔注15〕顧宸『註解』に「公詩多く受の字を用ふ。此の受字、更に奇趣を見る」とある。このこと、すでに宋・范温『潜溪詩話』に指摘し、『集千家註』にこれを引く。宇都宮遯庵の詳説にも『千家註』を挙げる。

〔注16〕「上巳の日、徐司録の林園宴集」詩（詳註巻二十一）に「薄衣積水に臨み、面を吹きて和風を受く」。

〔注17〕「春婦」詩（詳註巻十三）に「遠鷗水に浮かんで静に、輕燕風を受けて斜めなり」。

〔注18〕「李北海に陪して歴下の亭に宴す」詩（詳註巻一）に「修竹暑さを受けず、交流空しく波を湧く」。

〔注19〕「賈閣老の汝州に出さるるを送る」詩（詳註巻六）に「人生五馬貴し、二毛の侵すを受くる莫かれ」。

二語は連なつて続いており、まったく自然である。〈纔かに深し〉は、

水が浅いのである。〈秋水〉が引いてたかだか深さが〈四五尺〉になつたのを言い、下の〈恰も受く〉の句を生んでいる。公の詩は〈受く〉の字を愛用しているが、いちだんと奇趣があらわれている。「面を吹きて和風を受く」、「輕燕風を受けて斜めなり」、「修竹暑さを受けず」、「二毛の侵すを受くる莫かれ」といった例があり、なかでも〈野航恰も受く〉というのがとりわけ奇抜である。けれど山人は公を歓迎し、芋の羹や栗の飯によるもてなしがおわると、そこで〈秋水〉を好都合として小舟を浮かべ、一二の同好の者に伴つて舟遊びを楽しむのだ。

白沙翠竹江村暮 相送柴門月色新

白沙翠竹、稱ス境ノ清幽^{注20}。畱欸迄^{注20}暮^{注20}、月上^{注20}方^{注20}還^{注20}。主人殷勤^{注20}出^{注20}門^{注20}相送^{注20}。江村清幽、月色欺^{注20}畫^{注20}。餘歡陶然、乘^{注20}興^{注20}而歸^{注20}。通首覺^{注20}高人意氣相得^{注20}宛然^{注20}。結尤有^{注20}餘味^{注20}。韋莊常^{注20}愛^{注20}此二句^{注20}、吟諷^{注20}不^{注20}置^{注20}。良^{注20}有^{注20}以^{注20}矣。顧註^{注20}新字有^{注20}撒見^{注20}而驚^{注20}之意^{注20}。野景畱連、不^{注20}覺^{注20}月邑又新^{注20}矣。按^{注20}此篇敘^{注20}村家^{注20}幽趣^{注20}、而詩體極^{注20}清麗^{注20}、亦見^{注20}不^{注20}全^{注20}貧^{注20}。體與^{注20}事稱^{注20}、化工^{注20}之筆^{注20}。余嘗^{注20}謂^{注20}七律第^{注20}二句^{注20}領^{注20}全首^{注20}詩神^{注20}、句句皆從^{注20}此生^{注20}、斯爲^{注20}合作^{注20}矣。未^{注20}能^{注20}是^{注20}訣^{注20}、不^{注20}宜^{注20}作^{注20}也。如^{注20}此詩^{注20}可^{注20}見^{注20}已^{注20}。

〔注20〕〈送〉字、錢注および輯註は〈對〉に作り、輯註に「英華は〈送〉に作る」と注す。英華は、『文苑英華』卷三一八。

〔注21〕「唐詩實珠」に「下界已に秋水に乗じて野航を浮かべて之を訪ひ、直に談じて薄暮に至り、月上つて方に還るを言ふ」と。

〔注22〕「唐詩實珠」に「通首、高人意氣相得て宛然たるを覺ゆ」と。

〔注23〕韋莊、字は端己（八三六～九一〇）。『唐才子伝』卷十に伝がある。布目潮風、中村喬『唐才子伝の研究』および小川環樹編『唐代の詩人―その傳記』（横山弘執筆）参照。宋・計有功『唐詩紀事』卷六十八、韋莊の条に「後、子美の詩、〈白沙翠竹江村の暮、相送りて柴門月色新なり〉を誦し、吟諷して輟まず」と。ちなみに、その編にかかると「又玄集」にも、この「南隣」詩を収む。なお、近年、磊安福箋注『韋莊集箋注』（上海古籍出版社）

二〇〇二年)及び齊澣箋注『韋莊詩詞箋注』上下(山東教育出版社、二〇〇二年)が刊行されている。

(注24) 顧宸「註解」。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注25) 巧まざる自然な筆致をいう。例えば、明李贄『焚書』卷三「雜説」に「拜月・西廂は化工なり。琵琶は画工なり」と。

(注26) 『夜航詩話』卷一に、「(七律の)第二句の好は、尤も得難し。蓋し是の句は全首の詩神を領し、句句皆此れ従り生ず」と。

《白沙翠竹》は、あたりが清らかで静かなのを称する。引き留められて款待を受け《暮れ》に至り、《月》がのぼつてやつと我が家にもどることになった。主人はねんごろに《門》を出て《相送》してくれる。《江村》は静かで、《月色》は昼かともがうばかり。楽しく過ごした餘韻に心地よく、興のつきぬまま気分よく帰るのである。一首全体から、高雅の士との意気投合ぶりがさながら目に浮かぶような気がするし、結びにはとりわけ餘韻がある。韋莊はつねにこの二句を愛し吟詠してやまなかったというが、まことにものもつともなことだ。顧宸の注に、「《新》字には、ちらつとみて驚くという意がある。《江村》の美しい景色のもと、いつまでも立ち去りがたく居続け、ふと気がつけば、《月色》がまた《新》たになっている」と。按ずるに、この詩は村家の幽趣を述べており、詩の風格はきわめて清麗で、やはり《全く貧ならざる》ことをあらわしている。風格と事柄とがびつたりし、巧まざる自然な筆致である。わたしはかつて七律の第二句は一首全体の精神や気分を支配し、他の句はどれもここから生ずると言ったことがあるが、これは法度になかった作だ。この秘訣を能くしないうちは、作らないほうがよい。この詩のような例に、見ることができぬ。

033 和裴迪登_テ蜀州_ノ東亭_ニ送_レ客_ヲ逢_テ早梅_ニ相憶_テ見_ル上_ル寄_ル

迪音狄。關中_ノ人_ニ。善_ス詩_ヲ。與_ニ公及王維_一友_ト。善_ス蜀州_ハ屬_ニ成都府

ニ、在成都_ノ西百里_ニ。裴時_ニ依_ニ王維_一在_ニ蜀州_一。公_ノ集有_ニ和_{スル}裴迪登_ニ新津寺_一寄_ニ王侍郎_一詩_ヲ。維_ハ王維_ノ弟_ニ。嘗_テ爲_ニ刑部侍郎_一。是時蓋刺_ニ蜀州_一也。若其爲_ニ黃門侍郎_一。則後年_ノ事矣。舊本脱_ニ相憶_一二字_ヲ。從_ニ集註_一補_ニ之_一。

(注1) 明・高棟『唐詩品彙』に「裴迪、関中の人。宋・計有功『唐詩紀事』卷十六、裴迪の条に「迪、初め王維・崔興宗と俱に終南に居る。天宝の後、蜀州刺史と爲り、杜甫と友とし善し」という。また『全唐詩』(卷一二九)の小伝には「裴迪、関中の人。初め王維・崔興宗と与に終南に居り、同じ倡和す。天宝の後、蜀州刺史と爲り、杜甫・李頎と友とし善し。嘗て尚書省郎と爲る。詩二十九首」とある。蜀州は、今の四川省崇州市。但し、裴迪が蜀州刺史となったとするのは、誤り。裴迪と王維との交友については、入谷仙介『王維研究』(創文社、一九七六年)第十章「周辺の人々」に詳しい。

なお、錢起(字は仲文、七一三〜七八〇)に「裴頎侍御の蜀に使ひするを送る」詩(『全唐詩』卷三三九)があり、「柱史綬に年四十強、鬚髯美髮、清揚美なり」と詠じられているが、頎字について「一に迪に作る」とあることから、傳璇琬主編『唐五代文学編年史』(『中唐卷』)は、裴迪のことを詠じたものとみなして、裴迪が蜀に入ったのを上元元年(七六〇)二月の条に繫年し、その年齢をおよそ四十三歳と推定している。さらに馮棟「裴迪考論」(『唐代文学研究』第十輯、二〇〇四年)では、上元元年当時、四十二歳で、開元七年(七一九)生まれとする。もともと、陳内孝文「裴迪生年考」(『中国文学論集』三十三号、二〇〇四年)は、従来の説を否定し、六九九生まれの王維より「四十歳ほど年下」であったとみなしている。

(注2) 王維(字は夏卿、七〇一〜七八一)については、『旧唐書』卷一八、「新唐書」卷一四五に伝がある。その伝には蜀州刺史となつたことは見えないが、王維の「躬を責め弟を薦むる表」(『王右丞集』卷十七)に王維の官銜を蜀州刺史とし、皇甫湜「徹」がかつて蜀州刺史を務めた四人の宰相を詠じた「四相を賦す」詩(『全唐詩』卷三三三)の其四に王維が挙げられている。

(注3) 「裴迪が新津の寺に登つて王侍郎に寄するを和す」詩(詳註卷九)には、「王は時に蜀に牧たり」と注を附して、次のように詠じられている。

何恨倚山木 何の恨か山木に倚りて

吟詩秋葉黃 詩を秋葉の黄なるに吟ず

蟬聲集古寺 蟬聲 古寺に集まり

鳥影度寒塘 鳥影 寒塘を渡る

風物悲遊子 風物 遊子を悲しましむ

登臨憶侍郎 登臨 侍郎を憶ふ

老大貪佛日 老大 佛日を貪る

隨意宿僧房 隨意に僧房に宿せん

なお、他に 067「暮れに西」四「安寺の鐘樓に登って裴十廸に寄す」詩がある。

(注4) 刑部侍郎は、尚書刑部の次官で、正四品下。

(注5) 黃門侍郎は、門下省の次官で、正四品上。旧伝に拠れば、王縉が黃門侍郎となつたのは、広徳二年（七六四）のことである。

(注6) 東陽が底本とした明・邵傳『杜律集解』を指す。

(注7) 邵宝『集註』（卷二十三、簡寄）。なお、錢注（卷十一）および輯註（卷

八）にも「相憶」の二字がある。

〈廸〉、字音は狄。〈裴廸〉は、関中の人。詩を善くし、公や王維と友人で仲がよかった。〈蜀州〉は、成都府に属し、成都の西百里にある。裴廸は当時、王縉を頼って〈蜀州〉にいた。公の集に「裴廸新津寺に登って王侍郎に寄するを和す」詩がある。王縉は、王維の弟かつて刑部侍郎となつたことがある。この当時は、けだし〈蜀州〉の刺史であつたのだろう。いったい黃門侍郎となるのは、後年のことである。旧本は、〈相憶〉の二字を脱している。『集註』に従つてこれを補う。

東閣／官梅動三詩興一 還如三何遜在シカ揚州ニ

東閣、即東亭。官梅、官府之梅。動三詩興一言下因見ニ早梅ヲ、感シテ物

候之遷ニ、而興シテ懷有上レ咏、非レ謂ニ娛ニ物景一也。何遜ハ梁人。

南平王偉爲ニ揚州ノ刺史ト、引テ爲ニ賓客ト、掌書記室タリ。遜有ニ早梅、

詩ニ云、兔園標ニ物候一、驚時ニ最是梅。衝霜當レ路ニ發、映レ雪ニ

凝レ寒ヲ開。枝ハ横卻月觀、花邊凌風臺。應レ知早、飄落スルヲ、故

逐ニ上春ヲ來ル。此在ニ揚州ニ感傷シテ所レ咏スル。裴カ詩亦感シテ早梅ニ而

作。故用テ此ヲ比レ之。又何遜墓志ニ、東閣一タヒ開、競收ニ楊馬ヲ

詳ニ載ニ墨莊漫錄ニ。東閣ハ原漢ノ公孫弘ノ故事、言ニ南平王延ニ文學之

士ヲ。謂ニ東亭一爲ニ東閣ト、亦本ニ諸此ニ。蓋裴廸在ニ王侍郎幕ニ、如

何遜爲ニ南平東閣之客ト。乃逢ニ早梅ニ、感時ニ懷人ヲ、而動ニ詩興

ヲ、亦如何遜在ニ揚州ニ驚レハ時ニ最是梅之感ノ也。眞註引下何遜爲ニ揚

州ノ法曹ト咏中ノ「廸舍ノ梅花上。明一統志亦載之。誤。襲ニ偽蘇之妄ヲ

耳。葛常之カ韻語陽秋、揚用修カ丹鉛錄辨レ之詳ナリ矣。偽蘇トハ者、

南宋ノ時間中ノ鄭昂ト者、假ニ東坡ノ名ヲ、作ニ老杜事實一編。其所レ

引事、皆無ニ根據、反用ニ杜詩ノ見句ヲ、増減シテ爲レ文ヲ、而託シテ爲

ニ古人ノ語ト、謂ニ之ヲ偽蘇註ト。今千家註ニ蘇曰ト云。者是也。朱子文集

洪容齋隨筆詳ニ辨ニ其妄ヲ。然トモ猶襲レ謬ヲ不已、良ニ可笑也。

(注8) 明・徐師曾『文體明辨』卷十五に、この詩を載せ、〈東閣〉の下に「即

ち東亭」を、〈官梅〉の下に「官廸の梅」と注する。

(注9) 何遜（字は仲言、四六七？〜五一八？）の伝は、『梁書』卷四十九、文

学伝および『南史』卷三十三、何承天伝に見える。前者には、興膳宏編『六

朝詩人傳』に訳注（森田浩一執筆）がある。後者に『梁天監中、尚書水部

郎を兼ね。南平王引きて賓客と爲し、記室の事を掌らしむ」と。南平王は、

梁武帝の異母弟、蕭偉（字は文達、四七六〜五三三）のこと。『梁書』卷

二十二、「南史」卷五十二に伝がある。天監六年（五〇七）、使持節都督揚

徐二州諸軍事、右軍將軍、揚州刺史となつた。なお、何遜詩の校注として、

劉暢・劉琨注『何遜集注・陰經集注』（天津古籍出版社、一九八八年）

及び李伯齊校注『何遜集校注』（齊魯書社、一九八九年）がある。

(注10) 何遜の「早梅」詩（『古詩紀』卷九十三）は、次のごとくである。

兔園標物候 兔園 物候を標し

驚時最是梅 時に驚くは最も是れ梅

衝霜當路發 霜を衝み路に当たつて發し

映雪凝寒開 雪に映じ寒を凝らして開く

枝橫卻月觀 枝は横はる卻月觀

花邊凌風臺 花は邊る凌風臺

朝濯長門泣 朝に濯ぐ長門の泣

夕駐臨邛杯 夕に駐む臨邛の杯

應知早飄落 應に知るべし早く飄落するを

故逐上春來 故に上春を逐つて來たる

ちなみに、明・張溥『漢魏六朝百三名家集』（第八十六冊）は、詩題を

「揚州の法曹、梅花盛んに開く」に作る。

〔注11〕

輯註に「胡震亨曰く、何遜墓誌に東閣一たび開き、競つて楊馬を収む。

杜甫の東閣は此の誌に本づく。墨莊漫錄に載す」と。宇都宮遜庵の増広本にも引く。但し、明・胡震亨（一五六九～一六四五）の語は、何に見えるか、不明。その著に『杜詩通』四十巻がある由（『杜集書目提要』及び『杜集書録』に拠る）だが、未見。『唐音彙編』には見あたらない。『墨莊漫錄』は、宋・張邦基の撰。その巻一には、何遜の本伝に揚州に在りしことを言

わずとしてから、「余、後に別本を見るに、（中略）遜、東海剡の人。本州の秀才に挙げらる。射策當時の冠為り。官を奉朝請に歴す。時に南平王殿

下、中權將軍楊州刺史と為り、望は右戚に高く、実に賢主と曰ふ。晝を擁して庭を分かち、客を愛して士を接す。東閣一たび開き、競つて楊馬を収

む。左席皆啓き、争つて鄒枚を趨ふ。君は詞藝を以て早に聞こゆ。故に深く親礼し、引きて水部と為し、參軍の事を行はしめ、仍つて文を記室に掌

らしむ、云々（『稗海』本）という。ここに見える別本のことを、胡震亭は「何遜墓誌」と称したのか。なお、楊馬は、揚雄と馬融。『鄒枚』は、鄒陽と枚乘。いずれも漢代、賦の大家。すぐれた文学の士を指す。ち

なみに、『墨莊漫錄』は『唐詩實珠』（巻五十六、花木四）にも挙げる。『漢書』巻五十八、公孫弘伝に「是に於いて客館を起こし、東閣を開き

〔注12〕

以て賢士を延く」と。

〔注13〕

『杜律虞註』酬寄の部に「何遜、字は仲言。梁の天監中に揚州の法曹と

為る。廨舎に梅花一株有り、其の下に吟咏す。後、洛に居して梅を思ふ。因つて再任せられんことを請ふ。揚州に抵るに及んで梅花方に盛んに開

く」と。

〔注14〕

輯註に「按ずるに偽蘇註に何遜揚州の法曹と為り廨舎の梅花を詠ず。一

統志も亦た之を載す」とあり、宇都宮遜庵の増広本にも引く。また〔注19〕に挙げる『夜航詩話』巻四の偽蘇註について述べた箇所に続けて、「余、明一統志を見るに、梁の何遜が揚州法曹と為り、廨舎の梅花を詠するを載

す」というが、但し、『大明一統志』には見いだせない。

〔注15〕

南宋・葛立方（字は常之、一一二六～一一六四）の『韻語陽秋』巻十六に「近

時妄人有り、東坡の名を仮りて老杜事實一編を作る。一事として拠ること有る無し。遜、揚州法曹と作り、廨舎に梅一株有り、遜、其の下に吟咏すと謂ふに至つては、豈に學者を誤らざらんや」と。

〔注16〕

明・楊慎『丹鉛總錄』巻十九、詩話類、「偽書人を誤る」の条に「任防

の述異記・殷芸の小説・沈約の梁四公子記、唐人の杜陽雜編・天寶遺事、宋人の雲仙散錄・清異錄・杜詩偽蘇註の如き、時に盛行す。殊に學者を誤る」という。また『升庵詩話』巻八および『升庵集』巻五十七に東閣官梅の条あり、宋世妄人有り、東坡の名を仮りて杜詩注一卷を作り之を刻す。一時争つて杜詩を尚ぶ。而して坡公名天下に重し。人争つて之を伝ふ。而

れども其の偽なるを知らざるなり。（中略）近日、邵文莊宝乃ち其の註を手抄し杜詩七言律に入れ刻行す。豈に後學を誤らざらんや。偽蘇註の謬、宋世、洪容齋・嚴滄浪・劉須溪父子・馬端臨經籍考、皆力めて其の謬を辨

ず。而して文章の鉅公、邵文莊の如き者、乃ち独り之を信ず。亦た尺に短き所有るなり」という。文莊は、邵宝（字は国賢）の諡。

〔注17〕

南宋・朱熹（一一三〇～一二〇〇）の『朱文公文集』巻八十四、「章國華集注する所の杜詩に跋す」に「章國華、予を山間に過り、集注する所の杜詩を出して予に示す。其の力を用ふること勤めたり矣。然れども引く所の東坡事實なる者は蘇公の作に非ず。之を長老に聞くに、乃ち閩中の鄭昂

尚明偽りて之を為る。引く所の事皆根拠無し。反つて杜詩の見句を用ひ、増減して文を為り、而して其の前人の名字を傳して、託して其の語と為し、時世先後顛倒して次を失する者有るに至る。旧と嘗て之を考ふるに、

其の決して蘇公の書に非ざるを知るなり。況んや杜詩の佳處は用事造語の外に在る者有り。唯だ其れ虚心に諷詠して乃ち能く之を見る。國華更に予の言を以て之を求むる、以て三百篇を読むと雖も可なり。朱熹仲晦書

す」と。

ちなみに、王德毅他編『宋人伝記資料索引』（鼎文書局、一九八〇年）に拠れば、鄭昂は、福州侯官（福建省）の人で、政和五年（一一一五）の進士。国子祭酒、鄭穆（一一〇一～一一〇九）の孫にあたるといふ。章國華は、伝不詳。

なお、莫礪鋒「杜詩（偽蘇註）研究」（『文学遺産』一九九九年第一期）

では、朱熹の説は伝聞に過ぎず、確証がないとし、偽蘇注の作者については疑問のままにしている。

(注18) 南宋 洪邁(一一一三～一二〇二)の『容齋隨筆』巻一、浅妄書の条に、「俗間伝ふる所の浅妄の書、所謂靈仙散記・老杜事實・開元天宝遺事の属の如き、皆絶(はなは)だ笑ふ可し。然るに士大夫或いは之を信ず。老杜事實を以て東坡の作る所の者と為し、今、蜀本杜集を刻するに、遂に以て注に入る」云々という。

(注19) 『夜航詩話』巻四に「南宋の時、閩中の鄭昂といふ者、東坡の名を仮り、老杜事實一編を作る。其の引く所の事、皆根拠無く、反つて杜詩の見句を用ひ、増減して文を為し、而して託して古人の語と為す。之を偽蘇注と謂ふ。今、千家注の蘇曰くといふ者は是れなり。朱子文集に詳らかに之を弁す。洪容斎・嚴滄浪・劉須溪・馬端臨・楊用修等力めて其の妄を弁す。然れども猶ほ謬を襲ひて已まず、後学を誤る殊に甚だし」と。偽蘇注のことは、訳注稿(三)、012「曲江」二首其二の(注13)も参照。

《東閣》とは、ほかならぬ《東亭》のこと。《官梅》は、役所の梅。《詩興を動かす》は、《早梅》をみるることによつて、季節の移ろひに心感じて、感懷をもよおし吟詠するの言う。季節の風物を娛しむことを意味するのではない。《何遜》は、梁の人。南平王偉が揚州の刺史となつた時、引き立てて賓客とし掌書記室となつた。何遜に「早梅」の詩があり、次のように云う、「兔園物候を標し、時に驚くは最も是れ梅。霜を衝いて路に当たつて発す、雪に映じて寒を凝らして開く。枝は横たはる却月観、花は遶る凌風台。応に知るべし早く飄落するを、故に上春を逐つて来たる」と。これは揚州にあつて感傷して詠じたもの。裴廸の詩もやはり《早梅》に心感じて作られたので、これを用いて比擬したのだ。また「何遜の墓誌」に「東閣一たび開き、競つて楊馬を収む」とあり、詳しくは『墨莊漫錄』に載せられている。《東閣》は、元来、漢・公孫弘の故事で、南平王が文学の士を招いたことを言う。《東亭》を《東閣》というのも、やはりこれに基づく。けだし裴廸は王侍郎の幕府にあり、何遜が南平王の《東

閣》の客であつたのと同様である。虞註に何遜が揚州の法曹となり廨舎の梅花を詠じたことを引き、「明一統志」もこれを載せるが、誤つて偽蘇注のでたらめを踏襲したのだ。葛常之の『韻語陽秋』や楊用修の『丹鉛錄』に、このことを詳しく弁じている。偽蘇とは、南宋の時、閩中の鄭昂なる者が、蘇東坡の名をかりて『老杜事實』一編を作つた。その引用している故事は、どれも根拠がなく、かえつて杜詩の現にある句を用ひ、増減して文章をでつちあげ、古人の語に仮託したもので、これを偽蘇註という。今、千家註に「蘇曰く」というのが、それである。『朱子文集』や『洪容斎隨筆』にそのでたらめぶりが詳しく弁じてある。さりながらなおも謬まりを踏襲してやまず、まことに可笑しいことだ。

此時對_レ雪_二遙_一相憶_ル 送_レ客_ヲ逢_レ春_ニ可_ニ自由_{ナル}

裴_カ詩蓋雪中_ノ早梅、句中言_二雪景_ヲ、故_ニ曰_二此時對_レ雪_ニ。憶_ハ言_二裴_カ憶_レ公_也。遠客倦遊、同病相憐_ム。故_ニ因_テ己_ニ感_ニ而念及_ス也。逢_ハ春_ニ即逢_二早梅_ニ也。可_ニ自由_{ナル}、加_ニ豈字_ヲ看_ム。言_二自欲_ニ禁止_{セント}而不_レ能_レ由_レ己_也。蓋羈旅之身、於_ニ送_レ客_ノ之際_ニ、忽逢_二早梅_ニ、見_ニ物候之遷_一、既_ニ傷_{シメ}恨_ニ別_ノ之懷_一、又動_二感_ス時_ノ之愁_一、其情豈_ニ可_レ禁_ヤ耶。宜_{ナリ}其賦_{シテ}以遣_レ興_也。或_ハ謂_二對_ス雪_ハ亦即逢_二早梅_ニ、非_ニ是_ニ。春_ニ一作_レ花_ニ、誤。

(注20) 『吳越春秋』閭閻内伝に「子胥、河上の歌を述べて曰く、同病相憐れみ、同憂相救ふ」と。

(注21) 釈大典「杜律發揮」巻上に「可謂_二豈可_ト」と。

(注22) 『文體明辨』に「へ自由なる可けんや」は、禁止せんと欲して而も己れに由る能はざるなり」と。

(注23) 原文は《愁》字の下に「一」点を缺く。今、これを補う。

(注24) 邵傳「集解」に、雪字の下に「花白」と注し、字都宮遯庵の詳説に「對_レ雪_ニトハ花ノ白ヲ云」とある。また『唐詩貫珠』に「雪に對すは、花の雪の如きに對す」と。

(注25) 錢注に「一に花に作る」と。

裴廸の詩は、けだし雪中の「早梅」を詠じたもので、句中に雪景を言うのであろう。されば「此の時雪に對して」という。「憶」は、裴廸が公を憶うの言う。遠く故郷をはなれて客遊に倦み、同病相憐れんでいる。それゆえ己れの感慨によつて氣にかけているのである。「春に逢ふ」は、詩題の「早梅に逢ふ」ことにほかならない。「自由なる可けんや」は、豈の字を加えて読む。湧き起る感慨を押し止めようとしても、自身ではどうにもできないことを言う。けだし羈旅の身で、客を見送る際、ふと「早梅に逢」つて、氣候風物の遷りゆくのをまのあたりにした。別れを恨む心を傷ましめるばかりか、時に感ずる愁いをつき動かす。その感情はどうして押さえきれようか。詩を賦して憂を晴らすのは、もつともなことだ。ある説に「雪に對す」のも、「早梅に逢ふ」ことにほかならないというのは、よくない。「春」字、一に「花」に作るのは、誤り。

幸三不折來傷二歲暮 若爲看去亂二鄉愁

※若爲：ドノヤウニアラフゾ

此述二己無時之感。折ノ字擒題。蓋用折梅逢驛使之折
上 翻案得妙。荆州記陸凱與范曄相善。自江南寄梅一枝
一 詣長安與曄。併贈詩曰、折梅逢驛使、寄與隴頭
人。江南無所有、聊贈一枝春。此蓋晉人云、非劉宋范曄
也。早梅ハ是先春早開、故曰歲暮、指臘末。若爲猶言
奈何。二句意一貫、卻幸其不寄梅花。是極無聊ノ語。
正所謂感時花濺淚之時。故言幸三不折花來贈使
我見之而傷歲暮之感。若得而見之、即亦所云驚心時
最是梅、尤使鄉愁動亂。至不寄之何也。裴詩
今不傳、意其中必有恨不得折贈之語。故和及之。
鄉愁字從送客來、暗中二有線。

(注26) 『唐詩貫珠』に「下界、己が時を撫するの感を述ぶるなり」と。

(注27) 『唐詩貫珠』に「此の聯、只だ一折字題を擒す」と。

(注28) 『唐詩貫珠』に「折字、梅を折つて驛使に逢ふの折を用ふるなり」と。
(注29) 『太平御覽』卷九七〇「梅」、「事類賦」卷二六「梅」、「方輿勝覽」卷二
二「南安府」に引く。但し、『太平御覽』では「折梅」の二字を「折花」
に作る。

(注30) 南朝・宋の人。字は蔚宗(三九八〜四四五)。「宋書」卷六九ならびに「南
史」卷三三に伝がある。『後漢書』の撰者。

(注31) 「春望」詩(詳註卷四)の第三句。

(注32) 『文體明辨』に「迪が詩、今、伝わらず。意ふに其中必ず折り来らん
と欲す及び同じく看るを得ずの語有らん、故に和して之に及ぶ」と。また、
釈大典「杜律發揮」卷上に「蓋裴詩中言下不得一折贈一、無由二携看
二之意也」と。

(注33) 『唐詩貫珠』に「郷字、客を送る従り脈絡し来たる」と。

これは時事に触れての感慨を述べる。「折」の字は、詩題をしつかり
つかんでいる。けだし、「梅を折つて驛使に逢ふ」の「折」を用いた
のであろう、翻案のしかたが絶妙だ。『荆州記』に「陸凱は范曄と仲
がよかった。江南より梅一枝を寄せ、長安に至り范曄に与え、併せ
て詩を贈った。曰く、梅を折つて驛使に逢ふ、寄与す隴頭の人。江
南有る所無し、聊か贈る一枝の春」とある。これはけだし晋の人で
あるという。劉宋の范曄ではない。「早梅」は、春に先んじて早く開
花するので、「歳暮」といい、臘末を指す。「若爲」は、奈何という
のとほぼ同じ。二句は意味が一貫し、かえつて「梅」花を寄越さな
かったのをもつての幸いだとしている。これは極めて無聊のあまり
吐かれた語である。まさしくいわゆる「時に感じて花にも涙を濺ぐ」
という時で、されば「幸ひに」も、花を「折」つて贈り私にそれを見
て「歳暮」に心傷ましめるような気持ちを起こさせなかつたと言う。
もしそれを手にして見ていたなら、ただちに「時に驚くは最も是れ
梅」というふうになつて、とりわけ「郷愁」に心かき「乱」され、
どうしようもない状態になつていたはずである。裴廸の詩は、今に
伝わっていないが、思うにそのなかに手折つて贈ることができない

のが残念だという語がきつとあつたはずで、それで唱和してこれに言及しているのである。〈郷愁〉の字は〈客を送る〉から来ており、暗につながっている。

江邊一樹垂垂トシテ發ツ 朝夕催シテ人ヲ自白頭

※朝夕催人：コレハマアナニトドウセフゾ

江邊ハ公自謂ニ其所ヲ居。蓋宅邊亦有梅一株也。垂ハ幾ニ也。將レ及也。垂垂ハ旦夕欲發シテ之貌。司空曙垂垂身老將ニ傳レ法ヲ僧貫休一瓶一鉢垂垂シテ老、亦謂ニ欲シテ老シテ之貌。或ハ解シテ作ニ梅帶レ雪貌ト、誤泥ニ上ニ對ス雪ニ。非レ所以ニ言ニ流年之感ヲ也。催人ハ催人ノ白頭也。二句乃波瀾、既幸ト裴カ之不ニ贈示ニ而免レ動ニ吾感愴ヲ如何。眼前一樹ノ江梅、便復垂垂シテ欲發シテ、旦夕催シテ愁ヲ使ニ人頭白ニ終ニ難ニ免ニ於年芳之惱ヲ人ヲ也。自字承ニ上文有味、頭白亦映ニ帶ス花白ニ。此以ニ裴詩既ニ來公作ニ和ニ之時ニ一言ニ之ヲ。或ハ以ニ此時對ニ雪ニ遙ニ相憶ニ爲ニ公憶ニ裴ニ謬ニ矣。

〔注34〕 釈大典『詩語解』に「韻會ニ垂ハハハハバンド也」と。韻會は元・熊忠『古今韻會舉要』のこと。なお、〈垂垂〉は唐代の俗語で、しだいしいに、だんだんとの意。

〔注35〕 中唐・司空曙の七律「衡岳の隱禪師に贈る」詩（『全唐詩』卷二九二）の第七句。

〔注36〕 晚唐五代・貫休（八三三〜九二二）の七律「情を陳べ蜀皇帝に献ず」詩（『全唐詩』卷八三五）の第三句。

〔注37〕 『文體明辨』に「梅の雪を帯ぶるの貌」と。顧宸『註解』にも「垂垂は、花の雪を帯ぶるの状」と。

〔注38〕 『唐詩實珠』に「只だ自字、上文を承けて甚だ明らかなり」と。

〔注39〕 『唐詩實珠』に「頭白も亦た花の白きに映帶す。筆精墨妙」と。

〔注40〕 顧宸『註解』に「見る可し雪に対しての句、是れ公、裴を憶ふ。正に此の句と隱映す」と。宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

〈江辺〉は、公自らその住まいをいう。けだし宅辺にもやはり梅一株があつたのだろう。〈垂〉は、ほとんど。今にもそうなりそうなの

をいう。〈垂垂〉は、旦夕のうちに〈発ハツ〉かんとするさま。司空曙の「垂垂として身老い將に法を伝へんとす」、僧貫休の「一瓶一鉢垂垂として老ゆ」も、やはり老いんとするさま。あるいは〈梅〉が〈雪〉を帯びるさまと解するのは、誤つて上の〈雪〉に對すに拘泥したのである。歲月が過ぎゆくことへの感慨を述べたわけではない。人を催すは、〈人〉の〈白頭〉を〈催〉すのである。この二句は、起伏変化にとみ、裴迪が〈梅〉花を贈り示さず、私に悲しい思いをさせずにすんだのをもつつけの幸としたのに、どうしたかことか、眼前の「一樹」の江へ梅が〈垂垂〉として今にも〈発〉きそう、旦夕に愁を〈催〉して〈人〉の〈頭〉を〈白〉くさせようとしている。結局、春の花が人を悩ますのを免れがたいのである。〈自〉の字は、上文を承けて味わいがある。〈頭〉が〈白〉いのも、花の白いのと照応関連している。これは裴迪の詩が届いてから公が唱和する詩を作った時のことをいう。ある説に、〈此の時 雪に対して遙かに憶はる〉を、公が裴迪のことを憶うとするのは、でたらめだ。

034 客至

公自註ニ喜ニ崔明府カ相過ル。薛廣文謂公ニ生母ハ崔氏、明府ハ蓋舅氏也。然トモ詳ニ詩徑ニ恐ハ不ニ是尊行ニ疑クハ是表兄弟（注1）。

〔注1〕 『而庵說唐詩』（卷十九）に「公の自註に、崔明府が相過るを喜ぶと。薛廣文謂ふ、公の生母は崔氏。明府は蓋し其の舅氏なりと。愚觀去するに、恐らくは是れ尊行ならず、必ず是れ表兄弟ならん」と。〈薛廣文〉は、明・薛益のこと。廣文は教授の意。『分類』（卷二、尋訪類）に見える。〈明府〉は県令。〈舅氏〉は母の兄弟。〈表兄弟〉は母方のいとこ。

公の自注に「崔明府が相過るを喜ぶ」。薛廣文がいう、「公の生母は崔氏。明府はけだしその兄弟であろう」と。さりながら、詩の筋みちを詳しくみると、おそらく年長者ではない。どうやら母方の従兄弟らしい。

舍南舍北皆春水 但見羣鷗日日来

首句用「在」水一方^(注2)詩意。次句用「海翁狎鷗」故事^(注3)。居在「江流曲處」舍之南北皆水而春漲瀾漫、殆欲浸岸^(注4)。於是羣鷗因水而來、遊於舍南北之間^(注5)、日與伴馴、坐^(注6)海上翁之趣矣。來字即前詩「所云相親相近」見忘機意^(注7)。然トモ但見二字有二人跡斷絕獨坐寂寥之感、爲喜客至^(注8)張本。抑亦將「閒鷗」說、作「極有交情、極不妄交」人。

(注2) 『詩經』秦風・兼葭に「所謂伊人、水的一方に在り」と。

(注3) 『列子』黃帝篇に見える。訳注稿(一)、001「張氏の隱居に題す」詩の(注26)参照。

(注4) 『而庵説唐詩』に「群鷗は水鳥。水に因つて来たり、舍の南北の間に遊ぶ。人跡断絶せり矣」と。

(注5) 訳注稿(五)、030「江村」詩の第四句。

(注6) 伏線となること。訳注稿(一)、002「鄭駙馬潛曜洞中に宴す」詩の(注10)参照。

首句は、「水的一方に在り」という『詩經』の句の意を用い、次句は、海辺に住む翁が鷗になれ親しんだという故事を用いている。住まいは、江の流れが湾曲するところにあり、〈舍〉の〈南〉と〈北〉とは、いずれも川で春になつて水面が漲り、ほとんど岸を浸さんばかりである。そこで〈群鷗〉がやつてきて、〈舍〉の〈南〉〈北〉の間に遊んでおり、日に日に馴れて、海辺に住む翁が鷗と親しんだというのと同じぐあいになつてきた。〈来〉の字は、前の詩に云う「相親しみ相近づく」で、機心を忘れる意を表している。されど〈但見〉の二字には、訪う人もぶつとりとだえ、ぼつねんと独り坐しているという寂寥感がある。〈客至る〉を喜ぶための伏線となつてゐる。そもそ

とみなして、みだりに人と交際しないのだ。

花徑不曾緣客掃 蓬門今始爲君開

※蓬門：ロジモン

二句一連、流水對法。閑居曾不引客^(注7)、故任落花埋徑^(注8)、是不惟懶慢、抑亦惜花^(注9)也。今爲君過臨^(注10)、始開門相迎。蓋好客寔音、屢屢而出也。蓬門^(注11)韋以^(注12)蓬者。蓋入園小門也。曰「今始」、不^(注13)開久矣。曰「爲君」、特延迎也。

(注7) 訳注稿(四)、021「九日藍田崔氏莊」詩の詳解に「十四字一氣に読み下す、之を流水對と謂ふ」と。その(注13)参照。

(注8) 『後漢書』崔駰伝に「(駰)憲、屢屢して門に迎ふ」とあり、李賢の注に「屢屢は、屢を納き之を曳きて行く。忽遽を言ふなり」。また鄭玄伝にも「国相孔融、深く(鄭)玄を敬し、屢屢して門に造る」と。

二句一連なりで、流水對の句法。閑居してこれまで〈客〉を招かずにおり、それゆえ落〈花〉が〈徑〉を埋めるにまかせていた。これは懶惰怠慢なせいばかりでなく、そもそやはり〈花〉をいとおしむ心ばえによるものなのだ。〈今〉、〈君〉が訪ねてくれた〈爲〉に、〈始〉めて〈門〉を〈開〉いて出迎える。けだし好客の聲に、履物をつつかけて出迎えるのであろう。〈蓬門〉は、蓬で葺いたもの。けだし庭に入る小門であらう。〈今始めて〉というのは、それまでずつと〈開〉かずにいたのだ。〈君が爲に〉というのは、わざわざ招き迎えるのである。

盤飧市遠無兼味 樽酒家貧只舊醕

※盤餐：ゴゼンブ 無兼味：サイノモノニトボシ 旧醕：ナミザケ

殮音孫、夕食也。市遠言村居僻陋。無兼味言唯一味也。

醕酒未漉者。因謂濁醪爲醕。言市隔難卒辨、盤殮僅一味、家貧無美釀。樽酒只濁醪、率薄殊甚、良可慙愧。

幸是親戚情親、應諒而不恨也。

(注9) 『字彙』に「殮、蘇昆の切。音孫。夕食なり。夕食故に夕に从ふ。俗に殮に作るは非」と。

(注10) 『字彙』に「鋪杯の切、音平。酒未だ漉さず。又た酔飽なり」と。『而庵説唐詩』に「酤は是れ酒未だ漉さざる者」と。

(注11) 『而庵説唐詩』に「盤飧は止だ一味を得、第二様有る無し」と。

〔注12〕 率薄は、質素なこと。例えば、『晋書』良吏伝、吳隱之伝に「隱之、將に女を嫁せんとす。（謝）石、其の質素なるを知る、女を遣るに必ずず當に率薄なるべしとて、乃ち厨帳を移して其の經營を助けしむ」と。

〈飧〉、字音は孫、夕食である。〈市遠〉は、田舎住まいの辺鄙なことを言う。〈兼味無し〉は、ただ一種類のものしかないことを言う。〈酤〉は、まだ漉していない酒。それで濁醪を〈酤〉という。ここは、〈市〉が隔つていて用意万端整わず、〈盤飧〉はわずかに一種類、貧乏で美味しい酒もない。〈樽酒〉は濁醪ばかりで、質素このうえなく、まことに恥ずかしいかぎりだ。さいわい親戚で気兼ねもいらぬ、きつと事情を酌んで遺憾に思わなくてくれるだろう、という意。

宵與鄰翁相對飲 隔籬呼取盡餘杯

※隔籬：カキゴシニ 呼取：ヨビヨセテ

公有南鄰北鄰詩。南鄰、錦里先生朱山人。北鄰、王明府。公詩所謂愛酒能詩者。又斛斯校書亦草堂之南鄰。江畔尋花詩云、走覓南鄰愛酒伴。自註斛斯融吾酒徒。今所指蓋斯人也。宵者問客之辭。言家釀不美、供給太乏。情意徒切不能娛客。茲有二一鄰翁、吾平生所對酌、宵與共飲否。如以為可、便呼取而來、令盡餘杯、亦畧助客之歡矣。隔籬言其容易。曰鄰翁、曰隔籬、亦與舍南舍北隱映用之。

〔注13〕 前出032「南隣」詩参照。

〔注14〕 「北隣」詩（詳註卷九）は、次のとおり。

明府豈辭滿 明府 豈に滿を辭せんや
藏身方告勞 身を藏して方に勞を告ぐ
青錢買野竹 青錢 野竹を買ひ
白嶺岸江皋 白嶺 江皋に岸く
愛酒晉山簡 酒を愛す晉の山簡
能詩何水曹 詩を能くす何水曹
時來訪老疾 時に來りて老疾を訪ひ

步屣到蓬蒿 步屣 蓬蒿に到る

* 何水曹は、梁・何遜のこと。

邵傳『集解』に「千家註に云ふ、明府は王明府か、輶註（卷七）に「公の詩多く県令を以て明府と為す。此の北隣は、蓋し王明府か」と。〈王明府〉については、「敬んで王明府に簡す」詩（詳註卷十）および「重ねて王明府に簡す」詩（詳註卷十）がある。

〔注15〕 「江畔花を尋ね七絶句」其一詩（詳註卷十）に、

江上被花惱不徹 江上 花に悩まされ徹せず

無處告訴只顛狂 告訴するに処無く只だ顛狂す

走覓南隣愛酒伴 走って覓む南隣酒を愛する伴

經旬出飲獨空牀 經旬出飲して独り空牀

〔注16〕 『而庵說唐詩』に「只だ一個の隣翁有り、未だ肯へて与に飲むや否やを審らかにせず。如し以て可と為さば、籬を隔てて呼取し、餘杯を尽さしめんと。なお、〈呼取〉の取は、単なる接尾辭。聴取・看取の取も同じ。

〔注17〕 『而庵說唐詩』に「隔籬の二字、舍南舍北の四字に照顧す、妙」と。公に「南隣」「北隣」の詩がある。南隣は錦里の先生朱山人で、北隣は王明府。公の詩にいわゆる「酒を愛し詩を能くす」る者である。

さらに斛斯校書もやはり草堂の南隣に住んでいる。「江畔花を尋ね」詩に「走って覓む南隣酒を愛する伴」といい、自注に「斛斯融は吾が酒徒」とある。今ここで指しているのは、けだしこの人であろう。〈肯〉は、客に問う辭。ここでの意味は、家で醸した酒は美味くないし、もてなしの品に乏しい。気持ちだけいたずらに何とかしたいと思うのだが、〈客〉を娛しませることができない。ここに一人隣家の翁がいて、ふだん酒を酌み交わす仲。一緒に飲みませんか。もしよろしければ、さっそく〈呼取〉せて、残りの酒（餘杯）を呑み（尽）させましょう、これもいささか〈客〉に興を添え喜んでもらえることになる、というのである。〈籬を隔つ〉は、そのたやすいことを言う。〈隣翁〉といい、〈籬を隔つ〉というのも、やはり〈舍南舍北〉と照応して用いている。

035 進艇^{（注1）}

廣雅^{（注1）}「船小ニシテ而長ヲ曰艇ト。村農所^レ用也。公暑中不^レ勝鬱鬱^{（注2）}、午間攜^{（注3）}妻子^{（注4）}、泛^{（注5）}江ニ取^{（注6）}涼ヲ也。

（注1）顧震「註解」に「広雅に曰く、船小にして長きを艇と曰ふ。村農の用ふる所なり」と。『廣雅』は、魏・張揖の著。その积水に艇字を載せるが、顧註に引く一文は見えない。なお、宇都宮遯庵の両著にも顧註を挙げる。

『広雅』に「船が小さく長いのを艇という」と。村の農民が用いるもの。公は暑いさなか鬱鬱たる思いにたえず、昼間妻子をつれて江にうかび涼を取ったのである。

南京ノ久客耕^{（注7）}南畝^{（注8）} 北望傷^{（注9）}神臥^{（注10）}北窓^{（注11）}

肅宗陞^{（注12）}蜀^{（注13）}爲^{（注14）}南京^{（注15）}見^{（注16）}前^{（注17）}。蜀在西^{（注18）}、然^{（注19）}自^{（注20）}長安^{（注21）}望^{（注22）}蜀^{（注23）}則^{（注24）}

爲^{（注25）}南^{（注26）}、故^{（注27）}號^{（注28）}南京^{（注29）}。詩ノ小雅^{（注30）}俶載^{（注31）}南畝^{（注32）}、又^{（注33）}豳風^{（注34）}饁^{（注35）}彼南畝^{（注36）}

。畝音某。公爲^{（注37）}浣花村ノ逸民^{（注38）}、聊亦耕^{（注39）}作^{（注40）}田園^{（注41）}、故^{（注42）}曰^{（注43）}耕^{（注44）}南畝^{（注45）}。自嘆^{（注46）}スル落魄^{（注47）}也。北望傷^{（注48）}神^{（注49）}、思^{（注50）}歸^{（注51）}望^{（注52）}中州^{（注53）}也。卧^{（注54）}北窓^{（注55）}、

陶淵明ノ故事^{（注56）}、避暑晝寢也。南畝^{（注57）}熱耘^{（注58）}、疲倦^{（注59）}而還^{（注60）}。聊爲^{（注61）}黑甜^{（注62）}、

以休^{（注63）}神氣^{（注64）}、偶因^{（注65）}臥^{（注66）}北窓^{（注67）}、遂^{（注68）}北望^{（注69）}、戀^{（注70）}關^{（注71）}、從^{（注72）}南思^{（注73）}北^{（注74）}、

公觸^{（注75）}景^{（注76）}然^{（注77）}。其厭^{（注78）}南中^{（注79）}之久^{（注80）}、思^{（注81）}中原^{（注82）}之切^{（注83）}ナル、平生此懷填^{（注84）}

胸^{（注85）}塞^{（注86）}膺^{（注87）}、故^{（注88）}每^{（注89）}事輒然^{（注90）}也。二句是序引。公畫臥^{（注91）}北窓^{（注92）}、苦暑

難^{（注93）}睡^{（注94）}、弔^{（注95）}身^{（注96）}思^{（注97）}鄉^{（注98）}、不^{（注99）}勝^{（注100）}無聊^{（注101）}、因^{（注102）}動^{（注103）}進^{（注104）}艇^{（注105）}之興^{（注106）}、欲^{（注107）}

以遣^{（注108）}悶懷^{（注109）}也。南京南畝^{（注110）}、北望北窓^{（注111）}、句中弄^{（注112）}巧^{（注113）}、亦偶然涉^{（注114）}筆

耳。學者宜^{（注115）}無^{（注116）}效^{（注117）}顰^{（注118）}也。

（注2）錢注（卷十一）及び輯註（卷七）は、〈臥〉を〈坐〉に作り、「一に臥に作る」と。

（注3）前出031「野老」詩の詳解に「肅宗至徳二載、明皇の行在せしを以て蜀郡を陞して南京と爲し、尹を置きて南京に比す」と。

（注4）『詩経』小雅・大田。

（注5）『詩経』豳風・七月。朱子の『集伝』に「饁は田に餉するなり」と。畑に食事を運ぶこと。

（注6）陶淵明の「子儼等に与ふる疏」に「常て言ふ、五六月中、北窓の下に臥

し、涼風の暫く至るに遇へば、自ら謂へらく是れ義皇上の人かと」、また『晋書 隱逸伝の陶淵明伝に「嘗て言ふ夏月虚閑、北窓の下に高臥し、清風颯として至れば、自ら謂へらく義皇上の人と」。

（注7）熱耘は、暑いさなかの草とり。『孔子家語』屈節解に「民は寒に耕し熱に耘る、曾て食を得ず」と。

（注8）昼寝のこと。例えば、北宋・蘇軾の「広州を発す」詩（蘇文忠公台註）卷三十八に「三杯軟飽の後、一枕黒甜の餘」とあり、その自注に「俗に睡りを謂ひて黒甜と爲す」と。

（注9）顧震「註解」に「肅宗至徳二載、成都府を以て南京と爲す。南從り北を思ふ、公、景に触れて皆然り」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

（注10）前出031「野老」詩の（注13）参照。

（注11）顧震「註解」に「或いは北窓に坐して無聊、因つて艇を進むの興を動かすなり」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

（注12）薛益「分類」（卷二、舟楫）に「言ふところは蜀中に留滞して、農畝に辱めらる、北のかた長安を望んで輒ち神を傷めて偃臥する所以なり。因つて其の悶懷を遣らんと欲するなり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

（注13）顧震「註解」に「南京南畝、北望北窓、句中巧を弄す、亦た偶然筆に渉る耳」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

（注14）訳注稿(三)、012「曲江二首」其一の詳解に「字ぶ者好んで此れに放ばば、則ち隣女の效顰なり矣」と。その（注16）参照。

肅宗が蜀を昇格させて〈南京〉としたことは、前に見える。蜀は西方に位置するが、長安から蜀を望めば南にあたることから、〈南京〉と号した。『詩経』の小雅に「俶めて南畝に載とす」、また豳風に「彼の南畝に饁とある。〈畝〉、字音は某。公は浣花村の逸民となり、いささか田園に耕作したので、〈南畝に耕す〉という。自ら落魄を嘆じているのである。〈北望 神を傷めしむ〉は、故郷に帰りたい思い、中原の地をながめやるのである。〈北窓に臥す〉は、陶淵明の故事で、暑さを避けて昼寝するのである。〈南畝〉での畑仕事に疲れ倦んでもどつてくると、まずは一寝入りして精神や気分を休めようとした。偶たま〈北窓に臥す〉ことによって、かくて〈北望〉して宮闕を恋

い慕うのである。南の地から北を思うのは、公が眼前の情景を目にする場合いずれもそうだ。南方の地に居ることの久しきを厭い、中原を思慕することの切実であるのは、平生この懐いが胸を填め心を塞いでおり、それゆえ事ごとによつてもそうなのである。この二句は序引。公は昼に「北窓に臥し、暑さに苦しんでなかなか眠られない、わが身を傷み故郷を思つて、無聊にたえず、そのため「艇を進む」興を動かし、悶懷を払おうとしたのである。「南京」と「南畝」、「北望」と「北窓」とは、句中に技巧を弄しているが、やはり偶然筆がすべつただけだ。学ぶ者はその真似をしないほうがよい。

晝引^テ老妻^ヲ乗^ラ小艇^ニ 晴^テ看^ル稚子^ヲ浴^ス清江^ニ

※昼：ヒルノマ 晴：テンキヨクテ

至^レ是^ニ見^ル題^ヲ。晝^ノ字緊^{シク}眠^ル臥^ニ北窓^ニ。謂^フ午休^ノ之^ノ間^ヲ、亦民間^ノ事也。公晝寝傷^レ神^ノ之餘、誘^ニ引^ニ老妻^ヲ、泛^レ艇^ヲ納^ル涼^ヲ。天晴江靜^{ニシテ}、風色爽然、稚兒嬉戲、喜^ニ浴^ニ清流^ニ。公於^レ是^ニ頗^ニ慰^ニ意^ヲ、與^レ妻相看^ニ爲^レ娛^ヲ也。此亦與^ニ晝紙^ニ爲^レ局^ヲ敲^ニ針^ヲ作^レ鉤^ヲ同一野態^ニ。非^ニ復^ニ昔日拾遺公^ノ夫人郎君^ニ矣。

(注15) 顧宸「註解」に「偶たま老妻と艇に乗す。日色晴和、稚子遂に清流に浴す」と。

(注16) 訳注稿(四)、030「江村」詩に「老妻紙に画きて棋局を為し、稚子針を敲いて釣鉤を作る」と。

(注17) 訳注稿(四)、030「江村」詩の詳解に「往日儼然たる拾遺公の夫人郎君、今は則ち真に是れ村婦野児」と。

ここに至つて題をあらわしている。「昼」の字は、「北窓に臥す」にぴたと接して、午休みをいい、これもやはり民間のことである。公は「昼」寝して「神を傷めし」むるあまり、「老妻」を連れ出して「艇」を浮かべて涼みに出た。空は「晴」れ「江」は波ひとつなく静かで、景色はさっぱりと心地よく、幼な子ははしゃいで「清」き流れに水「浴」びする。公はそれでいささか気持ちがあぐらで、妻

とその様子を見守つて娛しんでいるのである。これもやはり「紙に画きて局を為し」たり「針を敲いて鉤を作る」とと同じ田舎の様子で、もはや昔日の拾遺殿のお内儀や若様ではないのだ。

俱^ニ飛^ニ蛺蝶^ノ元相逐^ニ 竝^ニ薜^ノ芙蓉^ノ本自雙^ニ

※俱飛：ツレダチテアソブ 竝薜：イチツイノ

蛺蝶^ノ音甲^ニ。元相逐^ハ、言^フ非^ニ偶然俱^ニ飛^ニ也。薜音帝。竝薜^ハ芙蓉^ノ、雙頭蓮^ノ也。本自雙亦言^フ其合歡^ノ之^ノ狀、若^ク有^レ情而然^ル也。此皆即景^ノ所^ニ見^ル、而感^シ其似^ニ也。稚子追隨細君^ニ其泛^ニ之^ノ況^ニ、因^テ自喜^ニ聚^ニ爲^ニ娛^ヲ、亦興^ニ而比^ニ也。下句與^ニ上^ノ老妻^ノ反映^ス。蓋公見^ニ合歡^ノ蓮花^ヲ而感^シ結髮^ノ之情^ニ、憶^ニ昔爲^ニ一^ノ對^ノ佳夫婦^ノ、故^ニ曰^ニ本自雙^ニ。雙^ハ者匹敵^ノ對揚^ノ無^ニ優劣^ノ也。其所^ニ以^ニ特^ニ下^ニ老妻^ノ字^ヲ。於^レ是乎見^ニ其弄^ニ巧^ヲ矣。

(注18) 何に基づくか、不明。ちなみに、「字彙」や「正字通」には「古協の切、音劫」と。

(注19) 邵宝「集註」(卷二十三、舟橋類)及び薛益「分類」に「芙蓉は蓮花、竝薜双頭なる者有り」と。一本の茎に二輪の花をつけること。「分類」は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注20) 本自らと訓するが、本自は、本来、もともとの意。自は接尾語。

(注21) 薛益「分類」に「蝶の相逐ふ、蓮の帯を並ぶる、艇を進めて見る所の若しと雖も、言実には夫婦舟を同じうするに比す。所謂興にして比なり」と。

興・比は「詩経」に見える修辭法。周南・関雎の集伝に「興とは、先づ他物を言ひ、以て詠ずる所の詞を引き起こすなり」といい、また周南・螽斯の集伝に「比とは彼の物を以て此の物に比するなり」と。

(注22) 「文選」卷二十九、蘇武の詩四首其三に「結髮して夫婦と爲り、恩愛兩つながら疑はず」と。なお、明・胡繼宗撰「書言故事大全」卷一、夫婦類に「結髮」の語を載せ、「夫妻を謂ひて依依結髮之情と曰ふ」と。ちなみに、「書言故事」には、正保三年(一六四九)の和刻本があり、汲古書院刊「和刻本類書集成」第三輯に、その影印を収める。

(注23) 対揚は、対抗すること。例えば、「詩品」卷中、曹丕の条に「何を以て群彦を銓衡し、厥の弟に對揚する者ならんや」と。

〈蛺蝶〉、字音は甲。〈元相逐ふ〉は、偶然〈俱に飛ぶ〉のではないことを言う。〈薔薇〉、字音は帝。〈竝薔の芙蓉〉は、一本の茎に二輪の花をつけた双頭蓮である。〈本自ら双ぶ〉も、その睦み合うさまが、感情があつてそうしているかのようなのであるの言うのである。これはいずれも見たままの景色で、幼な子が後に付き従い細君とともに江に浮かぶ様子とそっくりであるのに心感じ、それで自ら喜んで一緒に楽しんでおり、これもやはり興にして比である。下句は、上の〈老妻〉と反対から映し出ている。けだし公は睦み合う蓮花を見て結髪の情に感じ、その昔似合いの夫婦であつたのを憶い出し、それゆえ〈本自ら双ぶ〉という。〈双〉とは匹敵対抗して優劣のないことである。わざわざ〈老妻〉の字を下したゆえんである。ここに技巧を凝らしているのが見てとれる。

茗飲蔗漿攜^レ所^レ有^レ 瓷甕無^レ謝^{スル} 玉爲^レ缸^ト

※^{注25}：テンモク 甕^{注25}：トクリ 無^{注25}：マケハセマイゾ 缸^{注25}：モタイ

茗^{注25}、即茶也。蔗、之夜反、甘蔗也。蔗漿^{注25}、取^{注25}甘蔗之汁^{注25}以爲^{注25}漿飲^{注25}。鳥莖^{注25}反。瓷甕^{注25}、立^{注25}瓦器。無^{注25}謝^{注25}、猶^{注25}言^{注25}不^{注25}讓^{注25}。蓋倉卒^{注25}偶興、不^{注25}具^{注25}酒肴^{注25}、茗飲蔗漿、攜^{注25}其所^{注25}有^{注25}、盛^{注25}以^{注25}瓷甕^{注25}。聊以供^{注25}遊^{注25}、何必用^{注25}玉缸^{注25}盛^{注25}美酒^{注25}而後爲^{注25}快^{注25}哉。此與^{注25}田家^{注25}老瓦盆^{注25}無^{注25}用^{注25}傾^{注25}銀^{注25}注^{注25}玉^{注25}同意。即興隨^{注25}分^{注25}知^{注25}足^{注25}、聊遣^{注25}其傷^{注25}神^{注25}耳。

〔注24〕『字彙』に「蔗、之夜の切、音和。甘蔗」と。なお、宇都宮遯庵の詳説には、『聯珠詩格』の増注に「蔗は之夜の切。諸蔗なり。今の甘蔗なり」とあるのを挙げる。

〔注25〕『広韻』に「甕、瓦器。鳥莖の切」と。

〔注26〕邵傳『集解』に「無謝」の下に「不讓」と注し、顧宸『註解』に「謝すること無しは、猶ほ譲らずと言ふがことし」と。『註解』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注27〕顧宸『註解』に「此れ田家の老瓦盆、銀を傾け玉を注ぐを用ふること無しと同意」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。〈田家の老瓦盆〉云々は、

「少年行」二首其一（詳註卷十）に、次のように見える。

莫笑田家老瓦盆 笑ふ莫かれ田家の老瓦盆

自從盛酒長兒孫 自ら從ず酒を盛りて児孫を長ずるを

傾銀注玉驚人眼 銀を傾け玉を注ぐ人の眼を驚かすも

共醉終同臥竹根 共醉終に同じ竹根に臥するに

*銀は銀樽。玉は玉液、即ち酒のこと。なお、〈注玉〉の二字、鈴木虎雄『杜少陵詩集』は〈玉に注ぐ〉と訓ずる。その場合は、玉杯。

〈茗〉は、即ち茶である。〈蔗〉は、之夜の反、甘蔗である。〈蔗漿〉は、甘蔗の汁を取って飲料としたもの。〈甕〉は、鳥莖の反。〈瓷〉〈甕〉は、いずれも瓦器。〈謝すること無し〉は、譲らずと言うのとほぼ同じ。けだしふと興がわきその気になって、酒肴を用意せず、〈茗飲〉や〈蔗漿〉を、ありあわせすべてひっさげ、〈瓷〉や〈甕〉に入れたのを持ってきた。とりあえず遊びに供するもので、どうして〈玉〉の〈缸〉に美酒を盛って痛快がる必要があるうか。これは、「田家の老瓦盆」でけっこう、「銀を傾け玉を注ぐ」のを用いることではないというのと同じ意味。即興で分に從つて足ることを知り、いささか気晴しをするのだ。

036 寄^{注2}杜位^{注2}

位^{注2}、公^{注2}從弟。嘗^{注2}爲^{注2}考功郎中^{注2}、以^{注2}其爲^{注2}李林甫之壻^{注2}、坐^{注2}流^{注2}新州^{注2}。今量^{注2}移^{注2}近郡^{注2}、公因^{注2}寄^{注2}詩問^{注2}之^{注2}也。薛虞卿云、觀^{注2}公送^{注2}柏別駕赴^{注2}江陵^{注2}詩^{注2}、則位^{注2}以^{注2}行軍司馬^{注2}在^{注2}江陵^{注2}矣。

〔注1〕尚書吏部に属し、官吏の勤務評定を掌る。從五品上。杜位が考功郎中であつたことは、『新唐書』卷七二、宰相世系表に見える。

〔注2〕李林甫は玄宗の宰相。十九年の長きにわたって政界を壟断した。天宝十一載（七五二）十一月没。その伝は、『旧唐書』卷一〇六、『新唐書』卷二三上、姦臣上。

〔注3〕今の広東省新興県。

〔注4〕清・顧炎武『日知録』卷三十一、量移に「唐朝の人、罪を得て遠方に貶竄せられ、赦に遇つて近地に改めらるる、之を量移と謂ふ」と。

〔注5〕 薛益のこと。『分類』（卷二、簡寄）に見える。『分類』は、宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。「柏別駕江陵に赴くを送る」詩というのは、大暦元年（七六六）作「蜀州の柏二別駕、中丞の命を將ひ、江陵に赴きて、衛尚書の太夫人と起居するを送り奉る、因りて從弟の行軍司馬位に示す」詩（詳註卷十八）のこと。〈別駕〉は、州の次官。〈江陵〉は、今の湖北省江陵市。〈行軍司馬〉は、節度使の副官。

〈杜位〉は、公の從弟。かつて考功郎中となり、李林甫の女婿であつたため、連座して新州に流された。今は少し都に近い郡に量移されておゐり、公はそれで詩を寄せて近況を問うたのである。薛虞卿が云う、「公の『柏別駕の江陵に赴くを送る』詩をみると、杜位は行軍司馬として江陵にいた」と。

近聞寛法離新州 想見歸懷尙百憂

※寛法：ゴヨウシヤ 百憂：サマハノシンキナラン

寛法、言「寛」罪「從」輕也。離去聲、去也。新州ハ屬嶺南道ニ去コト長安ヲ五千五百二十里。位蒙朝廷寛其罪、雖得離、貶所一、然未能入京、歸思之切、尙懷百憂。公想像シテ情況一、慙然如見、骨肉之感乃爾。中二聯即說其所二以憂也。

〔注6〕 詳註（卷十）に離字の下に去声と注する。

〔注7〕 『輯註』に「唐書地理志に新州新昌郡は嶺南道に属す。京師に至ること五千五百二十里」と。宇都宮遯庵の増広本にも引く。『唐書』は、『旧唐書』卷二十一地理志四。

〔注8〕 邵宝『集注』（卷二十三、簡寄類）に「朝廷其の罪を寛めて近郡に移す。貶所を離ると雖も、尚ほ未だ郷に還ることを得ざるなり」と。薛益「分類」も、ほぼ同じ。

〈寛法〉は、罪を寛くして軽くするのを言うのである。〈離〉は去声で、去る意である。〈新州〉は、嶺南道に属し、長安から五千五百二十里のかなたにある。杜位は朝廷がその罪を〈寛〉くしたおかげで、貶所を〈離〉れることができたといえ、いまだ京に入ることはできず、〈帰〉りたいとの思いが切実で、〈尙ほ〉〈百憂〉を〈懷〉いて

いることであろう。公は状況を想像して、まのあたりにしたごとく気の毒がつており、肉親としての感情はかかるぐあいである。中二聯は、その〈憂〉える理由を説いたものにほかならない。

逐客雖皆萬里去 悲君已是十年流

此悲量移之晚也。當時以林甫故、流竄萬里、不止位一、及二十年。豈不悲哉。今始得離、貶所一、尙未許歸朝一、亦可悲也。雖字已、字與尙字對針、無限曲折。

〔注9〕 邵傳『集解』に「此れ量移の晚きを悲しむ」と。

これは量移のおそいのを〈悲〉しんでいる。当時、李林甫の一件で、万里の果てに流竄されたのは、ただ杜位ばかりではなかったのだが、さりながら久しからずして召還された者が多かった。ひとり杜位のみが新州に滞り、もはや〈十年〉になる。どうして〈悲〉しくないわけがあるうか。今ようやく貶所を離れることができたが、なおも帰朝することを許されず、やはり〈悲〉しむべきことだ。〈雖〉の字や〈已〉の字は、〈尙〉の字とびつたり対応しており、無限の曲折がある。

干戈況復塵隨眼 髣髴還應雪滿頭

時中原禍亂未平、故言其憂吾身、已自不堪、況復世亂、到處戰塵、隨望望滿眼、尤可悲也。下句想見其緣憂、憔悴言羈旅百憂苦惱、雖未至老年、還應滿鬢雪然也。

時に中原の禍乱はまだ治まっていけないので言う。いったい我が身を憂えることさえ、自らたえられないのに、ましてや世は乱れ、いたるところで戦塵が上がり、望むに〈随〉つて〈眼〉に満つるありさま。もつとも悲しむべきことである。下の句は憂いによつて憔悴したのであることを〈想見〉し、羈旅の〈百憂〉や苦悩のせいでも、まだ老年にならないうちに、〈還つて応に〉（やはりきつと）〈鬢〉いっぱい〈雪〉のようになっていくにちがいないと言うのである。

玉壘題^レ書^ラ心緒亂^ル 何ノ時^カ憂^ニ得^シ曲江^ニ遊^{コト}

玉壘^ハ山^ノ名。在^ニ成都^ノ西北^ノ青城^ノ之^ノ界^ニ。去^リ成都^ノ八百里^ニ。按^ニ上元二年^ニ。公暫^ニ如^ク蜀州^ノ之^ノ新津^ノ青城^ニ。則是時^ニ在^ニ玉壘山^ノ下^ニ也。此以^ニ軍壘^ノ之^ノ義^ヲ映^シ射^シ干戈^ニ用^レ之^ヲ。謂^ニ己^モ亦客^ト天涯^ニ而

在^ニ戰亂^ノ中^ニ。是歲^ニ段子璋^ノ反^シ東川^ニ。蜀中^ニ騷然^ニ。緒^ハ絲端^ニ也。孫萬壽詩^ニ心緒亂^テ如^レ絲^ノ。此用^レ之^ヲ。公懷^レ親^ヲ憂^レ世^ヲ。哀^シ身^ノ戀^ニ家^ヲ。因^ニ題^ニ書^ル札^ニ。百感^ニ交^ル集^ル。心緒^所以^ニ亂^ル也。公自^ニ註^ニ位京

中^ニ有^ニ宅^ニ近^シ西曲江^ニ。公嘗^ニ家^ニ少陵^ニ。亦與^ニ曲江^ニ近^シ。曲江^ハ長安勝遊^ノ之^ノ地^ニ。公好^ニ數^ニ遊^ヲ焉。因^ニ思^ニ何^ノ時^ニ歸^リ京^ニ與^ニ位^共其^ノ歡遊^{シテ}而解^ニ此憂^ヲ乎。斯期^未可^レ知^ル。徒^ニ悵望^ニ悲歎^ニ。心緒^益亂^ル耳。公又

有^ニ示^ニ從弟^{位^ニ詩^上}。諸註^以爲^レ姪^誤矣。

(注10) 邵宝『集注』及び薛益『分類』に「玉壘は山の名。成都府の青城県に在り」と。顧宸『註解』は錢注に拠つて、梁李鷹『益州記』の「玉壘は沈黎郡に在り。蜀城の南を去ること八百里」と云うのを挙げる。分類、顧註ともに宇都宮遯庵の増広本に引く。

(注11) 宇都宮遯庵の増広本に挙げる明・単復の年譜。

(注12) 『資治通鑑』卷二二、肅宗の上元二年(七六一)四月の条に「壬午(二十八日)、梓州刺史段子璋反す。子璋驍勇にして、上皇(玄宗)に従ひ蜀に在りて功有り。東川節度使李奐奏して之を替らしむ。子璋兵を挙げ、奐を綿州に襲ふ。道、遂州を過ぐ。刺史虢王巨、蒼黄として属郡の礼を修めて之を迎ふ。子璋、之を殺す。李奐戦敗れ、成都に奔る。子璋自ら梁王と称し、黄龍と改元し、綿州を以て龍安府と爲し、百官を置き、又た劍州を陥る」とあり、五月の条に「乙未(十一日)、西川節度使崔光遠、東川節度使李奐と共に綿州を攻め、庚子(十八日)、之を抜き、段子璋を斬る」と。

(注13) 『説文解字』に見える。

(注14) 孫万寿、字は仙期。『隋書』卷七六に伝があり、それに引く。また「遠く江南に成し、京邑の親友に寄す」と題して『文苑英華』卷二四八及び『古詩紀』卷一二五に収む。

(注15) 曲江については、訳注稿(三)、012「曲江二首」其一の詳解参照。また013「曲

江二首」其二の詳解に「公、少陵に家す、曲江と近し」と。

(注16) (注5)に挙げた「蜀州の柏二別駕、中丞の命を得ひ、江陵に赴きて、衛尚書の太夫人と起居を送り奉る、因りて従弟行軍司馬位に示す」詩のこと。なお、杜位については、この他に「杜位の宅守歳」詩(詳註卷二)、「頃者位と同一故嚴尚書の幕に在り」と自注を附した「杜位に寄す」詩(詳註卷十八)がある。

(注17) 邵宝『集注』に「位は公の從姪」とあり、邵宝『集注』、薛益『分類』及び顧宸『註解』に「按ずるに位は公の姪」という。

〈玉壘〉は、山の名。成都の西北、青城の界にあり、成都から八百里。年譜を按ずるに、上元二年(七六〇)、公はしばらく蜀州の新津青城に赴いた。とすればこの時、玉壘山のもとにいたのである。

ここでは軍壘の意味を「干戈」に反映させて用いており、自分も天涯に客となり戦乱の中にいることをいう。この歳、段子璋が東川に反し、蜀中は騷然となった。〈緒〉は、糸の端である。孫万寿の詩に「心緒乱れて糸の如し」とあり、ここはそれを用いた。公は肉親を懐い世を憂え、わが身を哀しみ家郷を慕つて、それで書状に題するのである。くさぐさの感慨がさまざまに集まり、〈心緒〉が〈乱〉れるわけである。公の自注に「位は京中に宅有り、西は曲江に近し」と。公はかつて少陵に住まいし、やはり〈曲江〉とは近くであった。

〈曲江〉は長安の景勝地で、公は好んでしばしばここに遊んだ。それでいつになったら帰京して杜位と共に歓遊してこの憂いを晴らせるのだらうかと思うのである。その時期はいまだ分からず、ただ悵望悲歎して、〈心緒〉はますます乱れるのだ。公にはさらに「従弟位に示す」詩がある。諸注に杜位を甥だとみなしているのは、誤まりだ。

037 送^ニ韓十四^ノ江東^ニ省親^{スル}

韓十四、名無^レ考^注。江東^ハ江左^也。大江^ノ之^ノ東^ニ皆呼^ニ江東^ト。省親^ハ起^ニ居^{スル}父母^一也。張孚敬云、公送^ニ許八^ノ殷六^ノ觀省^ヲ詩題皆有^ニ歸^ノ字^一。

037 送^ニ韓十四^ノ江東^ニ省親^{スル}

韓十四、名無^レ考^注。江東^ハ江左^也。大江^ノ之^ノ東^ニ皆呼^ニ江東^ト。省親^ハ起^ニ居^{スル}父母^一也。張孚敬云、公送^ニ許八^ノ殷六^ノ觀省^ヲ詩題皆有^ニ歸^ノ字^一。

037 送^ニ韓十四^ノ江東^ニ省親^{スル}

韓十四、名無^レ考^注。江東^ハ江左^也。大江^ノ之^ノ東^ニ皆呼^ニ江東^ト。省親^ハ起^ニ居^{スル}父母^一也。張孚敬云、公送^ニ許八^ノ殷六^ノ觀省^ヲ詩題皆有^ニ歸^ノ字^一。

037 送^ニ韓十四^ノ江東^ニ省親^{スル}

此止く曰「江東省親」^{（注5）}。又詩尾有「故郷ノ字」。意フニ韓ハ乃公ノ郷人ニシテ、而其父母或ハ因^{（注5）}史朝義^{（注5）}入^{（注5）}東京^{（注5）}、避^{（注5）}亂^{（注5）}居^{（注5）}江東^{（注5）}也。

（注1）明徐師曾「文体明弁」卷十五に、この詩を載せ、詩題の「韓十四」の下に「名、考する無し」と注する。

（注2）『文体明弁』に「大明の張孚敬が曰く」として挙げる。張孚敬、原名は璉。字は秉用、号は羅峰（明史「卷一九六」）。『杜律訓解』二巻があるという。周采泉「杜集書録」参照。なお、邵宝「集注」（卷二十三、送別類）は、張孚敬の名を挙げぬものの、ほぼ同様の注。ちなみに、『文体明弁』は、度会末茂「杜詩評叢」（巻二）にも挙げる。

（注3）「許八拾遺江寧に帰り親省するを送る」詩（詳註巻六）。なお、許八については、訳註稿四、016「許八拾遺に因つて江寧の曼上人に奉寄す」詩参照。

（注4）「晩秋、長沙の蔡五侍御が飲筵にて殷六參軍が漫に帰り親省するを送る」詩（詳註巻二十三）。

（注5）史朝義は史思明の誤りであろう。乾元二年（七五九）九月、史思明が洛陽を陥れた。訳註稿四、024「別れを恨む」詩の（注13）参照。

〈韓十四〉、名は未詳。〈江東〉は、江左である。大江の東はみな〈江東〉と呼ぶ。〈省親〉は、父母を見舞うことである。張孚敬が云う、「公が許八・殷六を送る詩の題には、いずれも〈帰〉の字があるのに、ここはただ〈江東に省親す〉というだけだ。そのうえ詩の末尾に〈故郷〉の字がある。思うに韓は公と同郷の人で、その父母は史朝義が東京に入寇したので、戦乱を避けて江東に居住したのであらう」。

兵戈不^レ見老萊ノ衣 嘆息^{（注6）}人間萬事非^{（注6）}

※人間萬事非^{（注6）}ナニゴトモイスカノハシ

高士傳^{（注6）}老萊子年七十、父母猶存。著^{（注6）}五色斑斕之衣^{（注6）}、爲^{（注6）}嬰兒戲^{（注6）}於親^{（注6）}側^{（注6）}、欲^{（注6）}親之喜^{（注6）}。言不^{（注6）}稱^{（注6）}老^{（注6）}。韓蓋孝子^{（注6）}ニシテ、而年已^{（注6）}老^{（注6）}、故^{（注6）}比^{（注6）}之^{（注6）}。當時韓爲^{（注6）}冠亂^{（注6）}所阻^{（注6）}、不^{（注6）}使^{（注6）}三老親^{（注6）}得^{（注6）}相見^{（注6）}久^{（注6）}矣。抑^{（注6）}非^{（注6）}止^{（注6）}韓^{（注6）}也。干戈之禍、人間萬事咸負^{（注6）}平生^{（注6）}、各各離散^{（注6）}、漂泊卒^{（注6）}歲^{（注6）}、良可^{（注6）}慨嘆^{（注6）}耳。

（注6）薛益「分類」（巻二、送別）に「高士伝に、老萊子、二親を奉ず。行年七十、身に五色斑斕の衣を着、嬰兒の戯を親の側に為す。親の喜ばんことを欲す」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。但し、晋の皇甫謐「高士伝」の通行本には、この箇所は見えない。あるいは、蒙求「巻下「老萊斑衣」に引く「高士伝」に拠ったか。

（注7）顧宸「註解」に「逐客万里の流者は、止^{（注7）}だ韓のみに非ざるなり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

『高士伝』に「老萊子は、年七十で、父母がまだ健在であつた。五色のまだら模様の衣を着て、親の側で嬰兒のようなしぐさをした。親を喜ばせようとしたのである。老という言葉を口にしなかつた」と。韓十四は、けだし孝行息子で年すでに老いていたので、これに比したのであらう。当時、韓は外寇内乱に阻まれて、老いた親に長い間会うことができずにいた。けれども、そもそもただ韓ばかりではないのである。干戈の禍は、人間萬事ごとく平生にそむき、それぞれ離散したまま、漂泊して歳月を過ごしている、まことに慨嘆すべきことなのだ。

我已^{（注8）}無^{（注8）}家^{（注8）}尋^{（注8）}弟妹^{（注8）} 君今何^{（注8）}處^{（注8）}訪^{（注8）}庭闈^{（注8）}

※無家^{（注8）}ヤドナシ 何処^{（注8）}ドコヲシヨウドニ

公四弟見^{（注8）}前^{（注8）}。妹一人。寓^{（注8）}居^{（注8）}スル^{（注8）}同谷縣^{（注8）}。歌^{（注8）}有^{（注8）}妹有^{（注8）}妹在^{（注8）}鍾離^{（注8）}。良人早^{（注8）}歿^{（注8）}。諸孤癡^{（注8）}。是也。宅中相通^{（注8）}。小門^{（注8）}曰^{（注8）}闈^{（注8）}。東哲^{（注8）}補亡^{（注8）}詩^{（注8）}。眷^{（注8）}戀^{（注8）}庭闈^{（注8）}。心不^{（注8）}違^{（注8）}安^{（注8）}。李善註^{（注8）}庭闈^{（注8）}ハ親^{（注8）}所^{（注8）}居^{（注8）}也。上句直^{（注8）}承^{（注8）}第二^{（注8）}。因^{（注8）}韓^{（注8）}之得^{（注8）}親^{（注8）}之消息^{（注8）}。感^{（注8）}己^{（注8）}不^{（注8）}能^{（注8）}知^{（注8）}弟妹之所^{（注8）}。比^{（注8）}韓^{（注8）}更^{（注8）}不^{（注8）}可^{（注8）}堪^{（注8）}也。下句韓蓋風^{（注8）}聞^{（注8）}三老親^{（注8）}在^{（注8）}江東^{（注8）}。即^{（注8）}犯^{（注8）}亂^{（注8）}往^{（注8）}尋^{（注8）}之^{（注8）}。然^{（注8）}不^{（注8）}審^{（注8）}的^{（注8）}在^{（注8）}何^{（注8）}許^{（注8）}。故^{（注8）}曰^{（注8）}君今往^{（注8）}江東^{（注8）}。未^{（注8）}知^{（注8）}何^{（注8）}處^{（注8）}得^{（注8）}見^{（注8）}父母^{（注8）}。冀^{（注8）}其尋^{（注8）}不^{（注8）}久^{（注8）}而相遇^{（注8）}也。

（注8）訳註稿四、024「別れを恨む」詩の詳解。

（注9）「乾元中、同谷県に寓居し歌を作る」七首の其四（詳註巻八）に、次のように見える。

有妹有妹在鍾離 妹有り妹有り 鍾離に在り

良人早歿諸孤癡 良人早く歿して諸孤癡なり

長淮浪高蛟龍怒 長淮浪高うして蛟龍怒る

十年不見來何時 十年見ず 来たるは何れの時ぞ

扁舟欲往箭滿眼 扁舟往かんと欲すれば 箭 眼に滿つ

杳杳南國多旌旗 杳杳南國 旌旗多し

嗚呼四歌兮歌四奏 嗚呼四歌す 歌四たび奏す

林猿爲我啼清晝 林猿 我が爲に清晝に啼く

*鍾離は、今の安徽省臨淮県。癡は、がんぜないこと。妹については、

ほかに「元日章氏の妹に寄す」詩（詳註巻四）がある。

（注10） 宇都宮遷庵の増広本に「闕 増韻に宮中相通する小門なり」と。『増韻』

は、『増修互注礼部韻略』のこと。

（注11） 西晋・束皙（二六一―三〇〇）の「補亡詩六首」の其一（『文選』巻十

九。張達『会粹』（巻九）に挙げ、宇都宮遷庵の詳説に引く。

（注12） 『文選』巻四十、沈約の「王源を奏彈す」に「風聞東海王源」とあり、

慶安五年刊本に「ホノカニキク」と傍訓を施す。

（注13） ちなみに、『夜航詩話』巻三に「的は、明なり。実なり。猶ほ定と言は

んがごとくして重し。達失加側と訳す」とし、王建・杜牧・白居易ほかの

詩例を挙げる。

公の四人の弟については前に見える。妹は一人。「同谷県に寓居する歌」に「妹有り妹有り鍾離に在り、良人早く歿し諸孤癡なり」というのが、それである。宅中の相通する小門を「闕」という。束皙の「補亡詩」に「庭闈を眷恋して、心邊安せず」とあり、李善注に「庭闈は親の居る所なり」と。上句は、直ちに第二句を承け、韓十四が親の消息を得たことから、己れが弟妹の居所を知ることができずにいるのに心傷めて、韓に比べるとつとたえられないのである。下句は、韓がけだし老親の江東にいることを聞いて、ただちに乱のさなかを尋ねにゆくのだろう。しかしながら、はつきりどこにいるやらしかと審らかでなく、それゆえ「君」は「今」江東にいつても、「何れの処」で父母に会うことができるかわからないが、どうか久

しからずしてめぐりあえることを願っているというのである。

黄牛峽静ニシテ灘聲轉シ 白馬江寒ニシテ樹影稀ナリ

※転…カハリ

此乃嘆ス道路之不_レ易_{カラ}也。山夾_ム水曰_レ峽_ト。峽流險難_{ナリ}曰_レ灘_ト。音嘆。荆州記_ニ西陵ノ峽中有_二黄牛山_一、重嶺疊起_ス。崖間有_レ石如

人牽_レ牛_ヲ。人ハ黒牛ハ黄、故ニ名ツク。下有_二灘曰_二黄牛灘_一。自_レ此

東入_二西陵ノ界_一。至_二峽口_一一百許里。水經_ニ註_ニ黄牛峽、巖石既_ニ高

々、江湍_ニ紆廻_ス。雖_ニ途經_ニ信宿_一、猶望_ニ見_レ之_ヲ。故_ニ行_レ者_一謠_ニ曰_一、

朝_ニ發_ニ黄牛_一、暮_ニ宿_ニ黄牛_一、三朝三暮、黄牛如_レ故_ノ。其難_ニ如_レ是

也。峽静ハ言_ニ秋後水退勢減_一。灘聲轉ハ言_ニ峽路迂廻、各難曲折、

每_レ轉_ニ一灘_一、聲響別_ニ起_一也。白馬江ハ蜀州江ノ名。明一統志_ニ白馬

江ハ在_二崇慶州ノ東北十里_一。源自_ニ江源ノ廢縣_一、東_ニ入_ニ新津縣ノ界_一。

舊説因_テ謂_ニ此聯倒句、韓從_ニ白馬江_一經_ニ黄牛峽_一而去_レ也。然_ニ崇慶

ノ白馬江ハ在_二成都ノ西百里_一。爲_ニ公與_ニ韓別_一處_ト、不_レ當。此ハ蓋謂

江陵ノ白馬洲_一。寰宇記_ニ王僧達爲_ニ荆州刺史_一、大水、江溢_レ堤壞

ル。刑_ニ白馬_一祭_ニ江神_一、酌_ニ酒_一於_ニ江_一、水退_テ堤出_ト。此乃出_レ峽_ヲ

所經_レ也。江寒_ニ樹影稀_一、言_ニ江風秋寒_一、林樹落盡_シ、物景蕭索

トシテ、旅況悽慘_{ナル}也。轉_ニ一作_ニ急_一、非。

（注14） 例えば、『広韻』に「峽、山の水を夾むなり」、「字彙」に「又た山峭し

く水を夾むを峽と曰ふ」と。

（注15） 何か基づくところあるのか、不明。

（注16） 『荊州記』は、劉宋・盛弘之の撰。薛益『分類』に「宜都西陵峽の中に

黄牛山有り。重嶺高崖有り、崖間に石有り、人の力を負うて牛を牽くか如

し。人は黒く牛は黄なり。山の下に牛灘有り、此れ自り東方西陵に入る、

三峽の西なり」と。宇都宮遷庵の増広本にも引く。この箇所、『太平御覧』

巻五十三、地部一八、峽に見えるのと、少しく異同がある。また、錢注（巻

十一）、輯註（巻八）および顧宸『注解』挙げる『宜都記』に「黄牛灘自

り東のかた西陵の界に入る。峽口に至る一百許里」と。輯註や『注解』は、

宇都宮遷庵の増広本にも引く。

〔注17〕『水経注』卷三十四、江水に「灘有り黄牛峽と名づく。（中略）此の巖既に高く、加ふるに以て江湍紆廻す。途に信宿を遷と雖も、猶ほ此の物を望見す。故に行く者の謡に曰く、朝に黄牛を発し、暮に黄牛に宿す。三朝三暮、黄牛故の如しと」。

〔注18〕『大明一統志』卷六十七、成都府の条。但し江源を晋源に作る。東陽は顧宸「註解」に挙げるのに拠ったのだろう。宇都宮遯庵の増広本にも顧注を引く。

〔注19〕輯註は趙次公注に「白馬江は蜀州の江の名。今の称も亦た然り。乃ち韓の公と別れし処。此の二句、分ちて地の所在を言うなり」というのを引き、「当に趙注に従ふべきこと疑ひ無し」という。趙次公は、この詩を蜀州での作とするのである。

〔注20〕『太平寰宇記』卷一四六、山南東道五、荊州、江陵県の条に江堤の項があり、「梁の始興忠武王憺字は僧達、荊州刺史と為る。大水過ぎ江堤に溢れ、將に船を壊さんとす。憺親ら吏を率ゐ、雨を冒して壊れる所を計り丈餘之を築く。雨勢甚だ猛く、人皆恐懼し、或いは之を避けんことを請ふ。王曰く、王邊尚ほ身づから河堤を塞がんと欲す、我独り何の心あつてか以て免れんと。乃ち堤に登る。嘆息すること終日、膳を徹して白馬を刑し、神を祭り酒を流れて酌ぎ、身を以て百姓の為に命を請ふ。言終りて水退き堤出づ」とある。

なお、東陽は、もと錢注に挙げるのに拠つたものであろう。『寰宇記』に見える始興忠武王は、梁武帝の第十一子で、斉の和帝の時、荊州刺史となつた蕭憺（字は僧達、諡は忠武）のこと。ちなみに、王僧達は、劉宋の人（四二三～四五八）で、『宋書』卷七五「南史」卷二に伝がある。

〔注21〕錢注及び輯註に、「一に急に作る」と。これは道筋の容易でないのを嘆いているのである。山が水を夾むのを「峽」という。峽流の險難なのを「灘」という。字音は嘆（たん）に「西陵峽のなかに黄牛山がある。幾重もの嶺々が連なり起こり、崖間に人が牛を牽いているような格好の石がある。人は黒く牛は黄色をしているので、名づけられた。下に灘があつて黄牛灘という。ここから東に西陵の界に入つて峽の出口まで一百里ばかり」。『水経注』に「黄牛峽は巖石が高くそびえ、急流がまがりくねり、途中

二泊しても、まだそれが眺められる。それゆえ行く者が謡つていう、朝に黄牛を出発し、暮に黄牛に宿す、三日三晩、黄牛は相も変わらず」と。その難所ぶりはこのようなくあてあつた。「峽静」は、秋になつてから、水が退き勢いが減ずるのをいう、「灘声転ず」は、峽路がまがりくねり、各灘が曲折しており、一つ灘をめぐるごとに、水音がそれぞれ別に起こるのである。「白馬江」は、蜀州にある江の名。『明一統志』に「白馬江は崇慶州の東北十里にある。源は江源廃県より発し、東して新津県の界に入る」と。旧説は、それでこの聯を倒句だとし、韓は「白馬江」から「黄牛峽」を経てゆくのであるとみなしている。さりながら崇慶州の白馬江は成都の西百里にあり、公が韓と別れた場所とするのはあたらなない。これはけだし江陵の白馬洲であろう。『寰宇記』に「王僧達が荊州刺史となり、大水で江が溢れ堤が壊れた。白馬を犠牲にして江神を祭り、酒を江に注ぐと、水が退き堤が現れた」と。これこそ峽を出て通過する所である。「江寒くして樹影稀なり」は、江を吹く風が秋になつて冷たくなり、林の樹々は葉をすつかり落として、景色は物寂しく、旅況悲惨たるをいう。「転」字、一に「急」に作るの、よくない。

此別應ニ須各努力ス 故郷猶恐ラ未ニ同歸一

※各努力：オタカヒニシンハウスヘシ 猶恐：ソレテモヒヨツトシタラ

努力、勉勵其傾身ヲ自重ス 故郷指ニ洛陽一 同歸、言ハ公與韓

同歸一 潘岳詩ニ投シテ分ヲ寄ニ石友ニ、白首同所歸一 此用之ヲ。

猶恐ノ二字極苦シ。意欲レ必而事或違ン也。此畧折ノ句法。含蓄太

深。蓋從レ此一別、彼此各天、而到處亂邦戰場、亦已ニ危シ矣。

須各々努力自愛シ幸ニ無ニ罹病ニ陷コト禍ニ、但能令ニ身命ヲ生存

一、庶幾ハ俟ニ冠亂平定一、便得ニ故郷同歸一 是所ニ以不レ可

無レ年也。然トモ干戈之禍、何ノ時ニシテ而息一 恐クハハハ此願終ニ不レシテ

能レ遂コト而爲ニ異郷之鬼一、則此別竟ニ永訣ナラシ耳。依依不レ忍レ分

手、恨溢ニ乎言外一矣。顧註ニ云、韓往ニ江東一、既非ニ故郷一、我滯

蜀中ニ、未レ有ニ歸期一、送ニ故郷之人ヲ、不レ得レ爲ニ故郷之歸ヲ、
臨レ別ニ倍ク爲ニ黯然^(注25)。按ニ此詩公自註ニ「深悲極怨。蓋與下送鄭虔^(注27)詩
上難^(注26)爲ニ兄弟ノ、斷句亦有九重、泉路盡ニ交期^(注28)之意上、可レ謂ニ一字
一淚^(注29)。朱瀚云、氣韻淋漓、滿紙猶濕、信ナリ矣。

(注22) 『文体明弁』に見える。邵宝『集注』にも「故郷は洛陽を謂ふ」と。

(注23) 西晋・潘岳(二四七〜三〇〇)の「金谷集作詩」(『文選』卷二十)。

(注24) 顧宸『註解』。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

(注25) 梁・江淹(四四四〜五〇五)の「別れの賦」(『文選』卷十六)に「黯然
として銷魂する者は、唯だ別れのみ」と。

(注26) 東陽が底本とする邵傳『集解』に「公の自註に深く悲しみ極めて怨む
というが、南宋・吳若本による錢注には見えず、杜甫の自注ではない。

(注27) 訳注稿(二)、006「鄭十八虔台州の司戸參軍に貶せらるるを送る」詩。

(注28) 006「鄭十八虔台州の司戸參軍に貶せらるるを送る」詩の結句。

(注29) 詳註(卷十)に「朱瀚曰く、灘声・樹影の二句、韓に在つては是れ一片
の帰思。杜に在つては是れ一片の離情。氣韻淋漓、滿紙猶ほ濕ふ」と。ま

た『唐宋詩醇』(卷十五)に氣韻以下を挙げる。明・朱瀚(字は、霍臨
には、『杜詩七言律解意』四卷がある。『杜集書目提要』及び『杜集書錄
参照。

〈努力〉は、身を慎んで自重するのに勉め励むこと。〈故郷〉は、洛
陽を指す。〈同帰〉は、公が韓十四と〈同じく帰る〉の言う。潘岳
の詩に「分を投じて石友に寄せ、白首帰る所を同じくす」とあり、
ここではこれを用いる。〈猶ほ恐る〉の二字は、極めて苦しく、氣持
ちの上では必ずそうしたいと思うものの、事態はひよつとして違
うかもしれないということである。これは言葉をはしよつた略折の句
法で、含蓄がとても深い。けれど、ここで一たび別れると、たがい
にそれぞれ別の空の下、到るところ乱邦戦場で、やはりもう危険に
なっている。ぜひとも〈各おの努力〉し、自愛して幸いにも病氣に
罹ったり災禍に陥ることがないようにせねばならない。ただ身が
無事で命がありさえすれば、どうか外寇内乱が平定されるをまつて、

ただちに〈故郷〉に〈同じく帰る〉りたいものだ。それにはどうして
も長生きしなくてはならぬわけである。されど干戈の禍は、いつに
なつたらやむのだろうか。ひよつとするとこの願いは終に果たすこ
とができず異郷の亡者となるやも知れず、とすれば〈此の別れ〉が
結局は永の訣れとなるのだ。名残り惜しくいつまでも手を分かつに
忍びず、恨みが言外に溢れている。顧註に云う、「韓は江東に往くが、
故郷ではないうえに、自分は蜀中に滞留し、帰れるあてはない。故
郷の人を見送り、故郷に帰ることができず、別れに臨んでますます
黯然たる思いがする」と。按ずるに、この詩は公の自註に「深く悲
しみ極めて怨む」という。けれど「鄭虔を送る」詩と優劣がつけが
たい。結句にはやはり「九重の泉路交期を尽さん」の意があり、一
字一字が涙の粒だといえよう。朱瀚が「氣韻淋漓、滿紙猶ほ濕ふ」
というのは、まったくその通りだ。

038 所思

公自註「崔吏部漪。按顔眞卿傳^(注1)、至德中、吏部侍郎崔漪被^レ劾黜
降^{セラル}。蓋是時貶^ニ荊州司馬^ニ。觀^ニ詩中所^レ言、大^ニ是酒人^ニシテ
而公之親友也。

(注1) 輯註(卷七)に「顔眞卿伝に、至德中、武部侍郎崔漪劾されて黜降せら
る」と。これは『新唐書』卷一五三、顔眞卿伝に拠つたもの。『旧唐書』
卷二八には「(至德)二年四月、中書舍人兼吏部侍郎崔漪酒容を帯び入
朝し、諫議大夫李何忌班に在りて肅ならず、眞卿之を効す。漪を貶して右
庶子と爲し、何忌を西平郡司馬とす」という。

公の自注に「崔吏部漪」と。按ずるに顔眞卿伝に、至徳年間(七五
六〜七)、吏部侍郎崔漪は弾劾されて黜降された、とある。けれどこ
の時、荊州司馬に貶せられたのであろう。詩中に言うのをみると、
大した酒飲みで公の親友である。

苦^ク憶荊州^ノ醉司馬^ヲ 謫官尊酒定常^(注2)開^ン

※苦：シキリニ 定：オホカタ

苦猶切也。官一作居^(注3)。似^レ是^ニ。此言^ニ醉^テ而忘^ニ遷謫^ヲ。蓋亦無聊之極、出^ニ於^ニ不^レ得^レ已^{コトヲ}也。

(注2) 〈酒〉字、錢注(卷十一)および輯註は、〈俎〉に作り、「一に酒に作る」と。輯註は、宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

(注3) 錢注および輯註に「一に居に作る」と。輯註は、宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

〈苦〉は、切とほぼ同じ。〈官〉字、一に〈居〉に作る。その方がいいようだ。これは〈醉〉つて左遷貶謫の身を忘れることを言う。けだしやはり無聊が昂じたあげくの果てで、やむを得ない仕儀より出たものであろう。

九江日落醒^ル何^ノ處^ニ 一柱觀頭眠^{コト}幾回

※落：クレテ

九江在^(注4)荊州^ニ。禹貢^ニ過^ニ九江^ヲ至^ニ於^ニ東陵^ニ。荊州記^(注5)江水至^ニ潯陽^ニ、分^レ爲^ニ九道^ニ。一說^(注6)九江、卽洞庭湖、沅湘等、九水皆合^ニ於此^ニ。因

言^ニ九江^ニ醒^ル何^ノ處^ニ、言^ニ多^ハ不^レ醒^也。一柱觀^(注7)在^ニ江陵^ニ、松滋縣^ニ。渚宮故事^(注8)宋^ノ臨川王義慶鎮^ニ江陵^ニ、于^ニ羅公洲^ニ立^ニ觀^ヲ、甚大^ニ。而唯有^ニ一柱^ニ、衆梁皆共^ニ之^ヲ。唐^ノ陳鴻^ノ廬州同食館^(注9)記^ニ有

「丁字亭」。蓋以^ニ巨木^ニ一株^ニ埋^レ地^ニ作^ニ獨脚亭^ト。一柱觀卽是物^ノ也。

眠^ハ言^ニ醉卧^ヲ也。二句申^ニ言^ニ尊酒常開^ヲ、想^ニ醉鄉^ニ行樂^ヲ。言^ニ逍遙

九江^ニ、迄^レ晚^ニ猶多^ハ不^レ醒^也、醉卧^{スル}古觀^ニ、亦不^レ知^ニ其爲^ニ幾回^ニ也。何處幾回、承^ニ定字^ヲ問^ニ其果^ニ何如^ニ。蓋荊州幸^ニ有^ニ江湖

之勝^ニ、時泛^ニ舟^ニ遊賞^{シテ}、終日盡^ニ醉^ヲ、或過^ニ古蹟名境^ニ、醉眠忘

歸^ル、庶幾^ハ藉^ニ此風流^ニ、消^ニ遣^ニ謫官之憂^ヲ已^ニ。

(注4) 『尚書』禹貢に「岷山江を導き、東に別れて沱と爲る。又た東して澧に至り、九江を過ぎ東陵に至る」と。伝に「江分かれて九道と爲る、荊州に在り」と。錢注に挙げ、輯註に引く。輯註は、宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注5) 輯註に挙げる。宇都宮遯庵の増広本にも輯註を引く。

(注6) 薛益『分類』(卷二、簡寄)に「九江は即ち今の洞庭なり。岳州の巴陵県の西北に在り。沅・漸・元・辰・叙・西・澧・資・湘の九水皆洞庭湖に合す。是れを九江と名づく。瀟湘も亦た其の中に在り」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げ、「一統志も同じ」と注する。

(注7) 錢注および輯註に挙げる『渚宮故事』に「宋の臨川王義慶江陵を鎮す。羅公洲に于いて觀を立つ。甚だ大にして、而して唯だ一柱のみ」と。これは『說郛』卷十七に見える。『渚宮故事』は、『渚宮旧事』の一名。もと十卷。晚唐・余知古撰。なお、『衆梁皆之を共す』というのは、顧宸『註解』に挙げる『鱗角類事』に「江陵台甚だ大なり。唯だ一柱有り、衆梁之に共す」、もしくは薛益『分類』に挙げる西晋・張華『博物志』に「江陵の松滋県に台有り、甚だ大なり。而して唯だ一柱有り、衆梁皆此の柱に拱す」とあるのに基づくものか。輯註、顧註、分類いずれも宇都宮遯庵の増広本に引く。

(注8) 「長恨歌伝」の作者として知られる陳鴻の太和三年(八二九)作「廬州同食館の記」(『全唐文』卷六二二)に「合肥の郡城南門の東上を同食館と曰ふ。梁柱朽蠹し、軒戸欹傾し、断楸階に委し、椽落ち棟折れ、風雨雪霜、賓宿す可からず。太守陽平の路君、郡に刺たるの明年冬十月、年熟に向ひ民且つ閑。瓦を原に陶し、木を山に伐り、旧礎を磨き新礎を築く。過ち賓堂を豊かにし、過ち前軒を戟くす。怒桷蚪蚪、層檻牙牙、中回洞深、高檐騰掀、階間揖讓を容れ、楹間賓盤を容れ、柱間樂工を容れ、屏間將吏を容る。左右を寢食更衣の所と爲し、朱戸素壁、潔にして華ならず。東西廂複廊直澗し、又た西に下閣を開き養舍を作る。廡屋宏大、中敞南門を作り、旌旗駟馬を容る。北上に丁字亭を作り、亭北に朱檻を列し、城牆に面す。其の下、滌溝開導して水を通ず。因つて古岸に竹樹を植え、風月晏遊の地と爲す。東南は会稽自朱方は宣城・揚州、西は蔡・汝に達し、陸行して京師に抵る。江淮の牧守、三台の郎吏、出入して多く郡道に遊ぶに、是の館成り、大賓小賓、皆次舍する有り」云々と。『廬州』は、今の安徽省合肥市。『同食館』は、官吏の宿泊施設。『左氏伝』文公十六年に「廬自り以往、廬を振い同食す」とあるのに基づく語。

(注9) 初唐・王績(字は無功。五八五〜六四四)に「醉郷記」がある。

『九江』は、『荊州』にある。「禹貢」に「九江を過ぎて東陵に至る」、「荊州記」に「江水は潯陽に至つて分れて九道となる」と。一説に

〈九江〉は、即ち洞庭湖。沅水・湘水など九つの川が皆ここに合流し、それで九江という。〈醒むること何れの処ぞ〉は、ほとんど醒めないことを言うのである。〈一柱観〉は、江陵の松滋県にある。『渚宮故事』に「宋の臨川王義慶が江陵を鎮し、羅公洲に観を建てた。とても大きく、たった一本の柱があるだけで、たくさん人の梁がすべてこれを取りまいて」と。唐の陳鴻「廬州同食館の記」に丁字亭のことが見える。けだし巨木を地面に埋めて一本足の亭としたのであろう。〈一柱観〉は、かかる代物にほかならない。〈眠〉は、酔臥を言うのである。二句は、〈尊酒 常に開く〉を引き伸ばして、酔郷の行楽を想像している。〈九江〉の地にぶらぶらして晩におよぼま

でほとんど醒めず、古い〈観〉に酔臥することも、〈幾回〉あつたか知れないと言うのである。〈何処〉〈幾回〉は、〈定〉の字を承けて、その結果がどうかと問うている。けだし、〈荊州〉には幸い江湖の景勝に恵まれており、時には舟を浮かべて遊賞し、終日すっかり酔っ払い、あるいは古蹟名境を訪ねて、酔って眠り帰るのを忘れてしまっていることだろう。どうかこの風流にことよせて、謫官の憂を消してほしいものだ。

可憐懷抱向人盡欲シテ問ニト平安ヲ無ニ使ノ来一

※可憐：イトシヤ 尽：ウチアケル 無使来：オトツレナシ

上半言「所思之人」自レ此而下ノ乃言「己懷也」懷抱ハ蘭亭序（注10）語。謂「崔平生心事」人ハ公自謂。六朝以來語。蓋崔爲（注11）人磊落以公爲「知己」平生懷抱中事、向公傾盡（注12）數ナリ矣。所謂取「諸懷抱」一語言「一室之内」故「苦憶而憐」之（注13）、關（注14）心太切（注15）欲聞（注16）其無恙否ヤ。寇亂路梗（注17）卒無使人往來（注18）徒「悵望依依、不可奈何」耳。顧註「懷抱、即公苦憶之情、向人盡言訪其消息」太諤。

（注10）東晉・王羲之（三〇三—三六一）の「蘭亭序」（『古文真宝』後集）。（注11）釈大典『杜律發揮』に「人ハ子美自謂」。六朝以來ノ語。詩中多然リ。

注何ッ諤（注19）と。なお、『文語解』巻五には「崔鍾會与レ人意同」若當ハ針々、亦不レ過一処ニ下ニ針々、言當引ニ其許マ、若至ラバ語ハ人ニ（華佗伝）というのを例に挙げ、「コレ我ヲイフナリ」と。

（注12）「蘭亭序」に「夫れ人の相与に一世に俯仰するや、或いは諸を懷抱に取りて、一室の内に晤言し、或いは託する所に因寄して、形骸の外に放浪す」と見える。

（注13）顧震「註解」に「旧註俱に云ふ、崔が志を失ふ、毎每人に向つて懷抱を傾倒すと。愚謂へらく既に云ふ使の来る無しと、何に由つて其の傾倒を知らんや。且つ此の句を便して内に在り、下の〈故憑〉の二字と接せず。唯だ公、崔を懷ふの至り、人に向つて即ち其の消息を訪ふ。故に曰く懷抱人に向つて尽くすと。此れ公自ら其の懷抱を憐れむなり」。宇都宮遷庵の両著にも挙げる。

前半は〈所思〉の人を言い、これより以下は己れの懷いを言うのである。〈懷抱〉は、「蘭亭序」の語で、崔漪の日頃の心事のこと。〈人〉は、公自らの謂。自称に用いるのは六朝以來の語。けだし崔漪は人となり磊落で、公を知己だとみなしており、日頃〈懷抱〉中のことを、公にすっかり打ち明けることがしばしばであつた。いわゆる「諸を懷抱に取り、一室の内に晤言す」である。されば「苦憶」うて氣の毒がり、心を寄せることたいそう切実で、元氣でいるかどうか聞きたく思うが、外寇内乱によつて道路は塞がり、ついぞ使者の往来もなく、いたずらに悵望して氣にかけているものの、どうしようもないのだ。顧註に「懷抱」は、公の「苦憶」心情にほかならず、へ人に向つて尽くすは、その消息を訪うことを言う」とあるのは、でたらめもはなはだしい。

故「憑錦水」將「雙淚」好過瞿唐灘（注20）

※故：ワザニ 好過：ドウゾトコラスニ

故、猶特也。憑ハ依託スル也。錦水ハ即濯錦江。華陽國志（注21）蜀人織錦濯其中ニ、文綵鮮明、勝于初成ニ、他ノ江ハ則不レ如、故號錦江一。將訓以。雙淚ハ兩行之涙。好過殷勤ニ相囑スル之辭。祝其無

阻^{シテ}於^{スル}瞿唐之險^ニ、而得^ン達^{スル}於^{スル}荊州^ニ也。瞿唐、出^ル峽^ヲ之所^ヲ經^ル、在^ニ夔府ノ城東一里^ニ。兩崖對峙^シ、絕壁千丈、中貫^ス一江^ヲ、奔流電激^ス。灩澦堆當^ニ其口^ニ、在^ニ江之中心^ニ、突兀^シ而出^ル。水經註^ス、瞿唐峽口有^ニ孤石^ニ、冬^ハ出^ル水^ヲ二十餘丈、夏^ハ即沒^ス、秋時方^ニ出^ル。諺云、灩澦大如象^ノ、瞿唐不^レ可^レ上^ル。灩澦大如馬^ノ、瞿唐不^レ可^レ下^ル。峽人以^レ此爲^ニ水候^ト。是峽行第一險惡之處。過^ル此則得^ニ達^{スル}於^{スル}荊州^ニ也。憑^ニ仗^{シテ}無情之水^ニ、寄^ニ與^ス相思之淚^ヲ、亦極^ニ不^レ可^レ奈何^ノ之意。蓋公所居目下錦江之水、直^ニ向^ニ荊州^ニ而下^ル。因^テ臨流^ニ依依^シ、泫然淚落^テ點^ス水^ニ、是吾相思之信、冀^ハ得^ニ流^ニ到^ニ荊州^ニ使^ニ崔^ラ感^乙此情^ヲ矣。乃復殷勤^ニ相囑^シ、欲^ニ其無^レ阻^ニ於^{スル}險惡^ニ也。錦水ハ順流、能無^レ恙而下^ル。但恐^ハ瞿唐險波阻^ニ之。故^ニ殷勤^ニ囑^ニ其好過^ニ、苦^ハ憶之極、生^ニ斯癡想^ト。岑參北征^ノ道上見^ニ渭水^ヲ思^ニ秦川^ヲ詩^ニ、渭水東流去^ル、何^ノ日^ニ到^ニ西雍州^ニ、憑^ニ添^ニ兩行^ノ淚^ヲ、寄^ニ向^ニ故園^ニ流^ス、同一落想。瞿唐舊名西陵峽。瞿音句、驚懼^テ睜^レ目^也也。唐^ハ乃唐喪^也。人過^ニ此峽^ヲ、瞿然睜^レ目^也、幾將^ニ喪^ニ身^ヲ、故^ニ以^レ爲^ニ名^ト。灩澦ハ猶豫之轉訛^也。行舟至此^ニ、猶豫^シ欲^ニ返^ル、非^ハ決死^ニ拚^ニ身^ヲ、不^レ可^レ敢^テ度^也也。公^ノ詩中數^ニ有^ニ瞿唐灩澦^ヲ。凡詩^ニ用^ニ地名^ヲ、皆取^ニ其字義^ヲ。故^ニ爲^ニ讀者^ノ特^ニ詳^ニ疏^ス之^ヲ。

(注14) ちなみに、積大典『詩語解』卷上、故の条には「故ト憑ハ錦水將ニ双涙ト、好ト過ニ瞿唐灩澦堆ト、此故意也。言「特爲^ニ也」ト。」

(注15) 『華陽國志』は、東晉・常璩撰。全十卷。その卷三に「錦江、錦を織つて其の中に濯はば、則ち鮮明。他江は則ち好からず。故に命づけて錦里と曰ふ」と。

(注16) 南宋・祝穆『方輿勝覽』卷五十七、夔州の条に瞿唐峽の項があり「州の東一里に在り。旧名西陵峽。瞿唐は乃ち三峽の門、兩崖對峙し、中に大江貫く。之を望めば門の如し」と。

(注17) 北宋・樂史『太平寰宇記』卷一四八、夔州の条に「瞿唐峽は州の東一里に在り。古の西陵峽なり。連崖千丈、奔流電激す。舟人之が爲に恐懼す」

と。

(注18) 『水經注』卷三十三、江水に「水門の西に孤石有り、涇預石と爲す。冬水を出ること二十餘丈、夏は則ち没す。亦た裁に出る処有り。(中略)斯れ乃ち三峽の首なり」と。

(注19) 盛唐・岑參の「西のかた渭水を過ぎる。渭水を見て秦川を思ふ」詩(『唐詩選』卷六)。

(注20) (注16) 参照。

(注21) 何か基づくところあるのか、不明。唐喪は、徒勞の意。疊韻語。

(注22) 何か基づくところあるのか、不明。猶豫は、躊躇の意。双声語。

(注23) 杜詩には、詩題に用いられるものを含めて、「瞿唐(塘)」の語が十七例、「灩澦」が九例見える。ちなみに、李白は、「瞿唐(塘)」五例、「灩澦」一例。白居易は「瞿唐」七例、「灩澦」六例。なお、その地に縁がなかった王維には、用例が見あたらず、岑參や高適にもない。

〈故〉は、特とほぼ同じ。〈憑〉は、依託することである。〈錦水〉は、濯錦江にほかならない。『華陽國志』に「蜀人は錦を織つてここぞ濯う。いろいろが鮮明となり、織り上がったときよりもまさっている。ほかの江だとそうはゆかない、それゆえ錦江と号す」と。〈將〉は、以てと訓じる。〈双淚〉は、ふたすじの涙。〈好過〉は、ねんごろに頼む辞。〈瞿唐〉の難所に阻まれることなく〈荊州〉に届くことができるよう祈るのである。〈瞿唐〉は、峽を出るのに通過する所。夔府の城東一里のところにある。兩崖は對峙し、絶壁は千丈もあり、そのなかをひとすじの江が貫き、奔流がいなづまのように激しく走る。〈灩澦堆〉は、その入口にあたって江の真ん中にあり、突兀とつき出ている。『水經注』に「瞿唐峽の口に孤石がある。冬は水面から出ること二十餘丈、夏は没し、秋になると出てくる。諺に云う、灩澦大きき象の如し、瞿唐上る可からず。灩澦大きき馬の如し、瞿唐下る可からず」と。峽に住む人はこれを水候(水の状態をみる指標)としている」と。これは峽を行くのに第一の危険な難所で、ここを過れば荊州に達することができるのである。無情の水をよすがとし

て、思いの涙を寄せる、やはりきわめてどうしようもない意。けれど公の住まいの目の前を〈錦江〉の水がまっすぐ〈荊州〉に向って下ってゆく。そこで流れに臨んで思い牽かれて、さめざめと流す涙がぼたぼた水に落ちるが、これは君を思うわが便りであるから、どうか〈荊州〉に流れついて、崔漪にこの情を感じさせたいものだ。ねんごろに頼んで険悪に阻まれることのないように念じているのである。〈錦水〉は順流で、順調に流れ下ることができ。ただ恐れるのは、〈瞿唐〉の險しい波がこれを阻まんことだ。されば、ねんごろにその〈好く過ぎ〉んことを頼むのである、〈苦に憶ふ〉はてに、かかるたわけた想像を生じた。岑参が北征の途上、渭水を見て秦川を思う詩に「渭水東に流れ去り、何れの日にか雍州に到らん、憑つて両行涙を添へ、寄せて故園に向って流る」というのと、同一の着想である。〈瞿唐〉は、旧名西陵峽。〈瞿〉、字音は句。驚懼して目をみはることである。〈唐〉は、唐喪である。人がこの峽を過ぎるのに、瞿然として目をみはり、ほとんど身を喪わんばかりで、それゆえ名づけられた。〈灩澦〉は、猶豫の転訛である。行く舟がここに至ると、猶豫して引き返そうとする、死を決し身を捨てる覚悟でなければ、通り過ぎることをようしないのである。公の詩中にしばしば〈瞿唐〉や〈灩澦〉の語が見える。すべて詩に地名を用いる場合、いずれもその字義を取る。それゆえ読者のために特に詳しく意味が通じるよう説いた。

039 王十七侍御掄許攜酒至草堂^{注1}、奉寄^{注2}此詩^{注3}、便請^{注4}邀^{注5}高

三十使君^{注6}同^{注7}到^{注8}

時王掄以^{注9}侍御史^{注10}爲^{注11}彭州^{注12}刺史^{注13}。高適^{注14}蜀州刺史^{注15}。然^{注16}彭蜀去

成都^{注17}百里^{注18}、疑^{注19}二人^{注20}適^{注21}以^{注22}事^{注23}在成都^{注24}也。不^{注25}曰^{注26}高尹^{注27}而曰

高使君^{注28}、非^{注29}下^{注30}攝^{注31}成都^{注32}尹^{注33}一時^{注34}上^{注35}、明^{注36}矣。邀音要^{注37}、誘致^{注38}也。

(注1) 郁賢皓『唐刺史考』に拠れば、上元元年(七六一)九月、王掄は高適が

彭州刺史から蜀州刺史に転じた後を受けて、彭州刺史となった。杜甫に「王彭州掄を哭す」詩(詳註卷十七)がある。

(注2) 高適については、訳注稿(一)「杜文貞公伝」の(注57)参照。

(注3) 使君については、055「將に荆南に赴かんとして李劍州弟に寄別す」の第一句に「使君の高義今古を駆る」とあり、詳解に「使君、後漢書郭伋伝に漢の刺史は繡衣直使と同じ。故に使君と称す。唐の刺史の若きは、則ち漢の郡守耳。亦た使君と称す、蓋し沿襲の誤り耳」という。

(注4) 何か基づくところがあるのか、不明。

時に王掄は侍御史の肩書のままで彭州刺史となった。高適は蜀州刺史。しかしながら彭州と蜀州は成都を去ること百里、どうやら二人はおもしろも事情があつて成都に滞在していたのであろう。高尹といわずに〈高使君〉といつており、成都尹を代行している時でないことは、明らかだ。〈邀〉、字音は要。誘致する意。

老夫臥穩^{注1}朝^{注2}慵^{注3}起^{注4} 白屋寒多^{注5}暖^{注6}始^{注7}開^{注8}

※穩：ユツタリトシテ 暖始：ホツコリトシテカラ

起句言^{注9}隱居閑暇、隨意^{注10}起臥^{注11}。白屋^{注12}、白茅覆^{注13}屋^{注14}、賤者^{注15}所^{注16}居。

即題^{注17}所謂草堂也。寒多^{注18}、春尚淺也。上接^{注19}朝^{注20}慵^{注21}起^{注22}、下引^{注23}折^{注24}

野梅^{注25}。暖^{注26}始^{注27}開^{注28}、及^{注29}日高^{注30}升^{注31}而始^{注32}開^{注33}戸^{注34}也。二句見^{注35}寄^{注36}傲^{注37}

玩^{注38}世^{注39}。

(注4) 薛益「分類」(卷二、尋訪)に「白屋は白茅屋を覆ふ」と。顧宸「註解」

にも「白茅屋を覆ふを白屋と曰ふ」と。いずれも、宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。白茅は、ちがや。『漢書』蕭望之伝の顔師古注に「白屋は、白

蓋の屋を謂ふ。茅を以て之を覆ふ、賤人の居る所」と。

(注5) 寄傲は、気ままに過ぐすこと。東晉・陶淵明の「帰去來の辞」に「南窓に倚りて以て寄傲す」と。玩世は、世事を軽んじて気ままに楽しむこと。

『漢書』東方朔伝に「隠に依つて世を玩し、時に詭にして逢はず」と。

起句は、隠者暮しでのんびりと暇があり、意のままに起臥するの言う。〈白屋〉は、白茅で屋根を覆ったもの、賤者の住まい。詩題にいう〈草堂〉にはかならない。〈寒多し〉は、春なお浅いことである。上は〈朝に起きるに慵し〉に接し、下は〈野梅を折る〉を引き出す。

「暖始めて開く」は、日が高く昇るに及んでやと戸を開くのである。二句は気ままで世事を軽んじた態度がみてとれる。

江鶴巧ニ當ニ幽徑ニ浴シ 鄰鷄還過ニ短牆ニ來

※鶴：コウ 巧：オモシロク 浴：スナアビル

鶴ハ水鳥似レ鶴ニ。浴ハ浴スル沙ニ也。徑幽ニ故ニ鶴來リ浴ス。牆短ニ故ニ鷄過來ル。是作者著シ意處、宜無ニ漫爾ニ讀過ニ。鶴浴ニ徑沙ニ、見無ニ機心ニ、鄰鷄來リ遊、亦無ニ物我ニ。二句晏ク起テ所見、日暖ナル光景、村舍ノ幽趣、寫得テ宛然。

〔注6〕 薛益『分類』に「鶴は水鳥、鶴に似たり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

〔注7〕 例えば、梁・江淹（四四四～五〇五）の『雜体詩』三十首其十八（『文選』卷三十一）に「物我俱ニ懷ニを忘れ、以て鷄鳥に狎ニ可ニし」と。

「鶴」は、水鳥で鶴に似ている。「浴」は、沙浴びするのである。「徑」は「幽」なるがゆえに「鶴」が来て「浴」し、「牆」は「短」なるがゆえに「鷄」が「過」ぎて「來」る。これは作者が留意して述べているところであるから、漫然と読み過ごしてはならない。「鶴」が「徑」沙を「浴」するのは、機心がないのをあらわし、「隣鷄」がやって来て遊ぶのも、やはり物我の差別がないことである。二句は朝おそく起きて見たもので、日ざしの暖かな光景や村舎の幽趣をありありと写している。

繡衣屢ニ許ス攜ニ家醞ニ 卓ニ能忘ニ折ニ野梅ニ

※能忘：オモヒダサル

繡衣ハ指ニ王侍御ニ。漢武帝ノ時、御史領シテ繡衣直指使ヲ、出テ討シ姦猾ヲ、治ニ大獄ニ。卓ニ蓋ニ指ニ高使君ニ。漢志ニ二千石ノ卓ニ蓋ニ朱幡ニ。能忘ニ折ニ野梅ニ。言ニ定ニ不レ忘ニ也。折ニ梅ニ假ニ用ニ陸凱詩語ニ。公所ニ居江邊有ニ梅ニ、見ニ和ニ裴迪詩ニ。蓋高ニ嘗ニ既ニ過ニ草堂ニ。當ニ梅花之時ニ、折ニ枝ニ賞玩ス、故ニ言ニ此ニ以ニ促ニ之ニ。今復爛漫方ニ盛ニ、能不ニ憶ニ曾遊之興ニ邪。顧修遠云、起聯自敘、蕭條中具ニ有ニ氣岸ニ。三四ハ是白屋中

「閒景如此」。幽野中、繡衣卓蓋、儼然炫耀、忽來テ喧熱。從ニ極冷ニ寫シテ到ニ極炎ニ、布置甚奇。

〔注8〕 『漢書』卷十九上、百官公卿表上に「侍御史に繡衣直指有り、出でて姦猾を討ち、大獄を治む。武帝の制する所、常には置かず」と。

〔注9〕 『後漢書』輿服志に「二千石・中二千石は、皆皂蓋、兩廂を朱にす」と。

〔注10〕 前出033「裴迪蜀州の東亭に登って客を送り早梅に逢ひて相憶つて寄せらるるに和す」詩参照。

〔注11〕 前出033「裴迪蜀州の東亭に登って客を送り早梅に逢ひて相憶つて寄せらるるに和す」詩。

〔注12〕 顧宸『註解』に「起きるに懶し始めて開く」は、蕭條の中、具ニに氣岸有り。「暖くして始めて開く」は、只だ是れ寒氣を避け、暖を俟ニて始めて開くなり。適たま鶴の徑に當ニつて浴し、鷄の牆を過ニつて來たるを見る。此れ是れ白屋中の常景此の如し。幽野の中、綉衣卓蓋忽ち來たり喧熱す。極冷從り寫して極炎に到る、布置甚だ奇なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。氣岸は、氣概の意。

「繡衣」は、王侍御を指す。漢・武帝の時、御史は繡衣直指使を領して、地方に出て悪人を討ち、重大な事件を裁いた。「卓蓋」は、「高使君」を指す。「漢志」に「二千石は卓蓋朱幡」と。「能く忘れんや」は、きつと忘れないことを言うのである。「梅を折る」は、陸凱詩の語を借用する。公の住む江辺に梅があることは、「裴迪に和す」詩に見える。けれど高適はかつて草堂を訪れたことがあったのだから。梅花の咲いた時分で、枝を折って賞玩した。それゆえこのことを言つて促している。今再び爛漫とちようど花の盛りである。曾遊の興趣を憶い出さないうか、と。顧修遠が云う、「起聯は自らを叙したもので、蕭條としたなかに氣概がある。三四句は、「白屋」中の閑かな風景がかかる具合であることをいう。ここで、ひっそりとした野外の住まいに「繡衣」や「卓蓋」がおごそかに耀き、忽ちやつて來てにぎやかになる。極めて侘しい境界から一変してにぎにぎしく華やかな境界を写しており、配置がとて奇抜である」と。

戲^ニ假^テ霜威^ヲ促^シ山簡^ノ 須^レ成^ニ一^ニ醉^{シテ}習池^ニ同^{コトヲ}

御史ハ爲^ニ風霜^ノ之任^ヲ、彈^ニ劾^{シテ}不法^ヲ、威勢凜然、故^ニ稱^ニ霜威^ト。假威ノ字ハ本^ニ三^ニ狐假^ニ虎威^ト。霜威促^ニ人^ヲ、本是俗見、故^ニ曰^ニ戲假^ト。晉山簡鎮襄陽。習氏荆土ノ豪族、有^ニ佳園池^ト。簡每^ニ出^ル、多^ク之池上^ニ、置酒^{シテ}輒醉^テ而還^ル。曰^ニ此ハ是我高陽池也。此言^ニ戲^ニ假^ニ御史ノ嚴威^ヲ、拉^ニ高使君^ヲ以至^リ、共^ニ成^ニ一^ニ醉^ニ而回^ル。庶^{クハ}百花潭上之遊、可^レ擬^ニ習池之興^ニ也。斷句暗^ニ與^ニ起處^ニ相應^ル。亦見^ニ輻強^ノ之意。成^ノ字對^{シテ}屢許^ニ用^レ之。要^ニ踐言^ヲ果^{シテ}事^ト也。本集此次有^ニ王竟^ノ攜^ニ酒^ヲ高亦同過^ニ其^ニ用^ニ寒^ノ字^ヲ五言律詩^ト。

(注13) 訳注稿(四)、023「至日興を遣る北省の旧閣老、兩院の故人に奉寄す」二首 其二の詳解に「夫れ御史は風霜の任爲り、百僚の震恐する所」とあり、その(注23)参照。

(注14) 『戦国策』楚策一。

(注15) 『晋書』卷四十三、山簡伝に「永嘉三年(三〇九)、出でて征南將軍、都督荆湘交広四州諸軍事、節度と爲り、襄陽を鎮す。時に四方寇乱、天下分崩し、王威振はず、朝野危懼す。簡優游して年を卒へ、唯だ酒のみ是れ耽る。諸習氏荆土の豪族、佳園池有り。簡出でて嬉遊する毎に、多く池上に之き、置酒して輒ち酔へば還る。曰く此れ是れ我が高陽池なり」と。高陽の酒徒と号した漢の酈食其に因んで、かく言う。

(注16) 「王竟に酒を携ふ、高も亦た同じく過る。共に寒字を用ふ」詩(詳註卷十)に、

臥疾荒郊遠 臥疾 荒郊遠し
通行小徑難 通行 小徑難し
故人能領客 故人能く客を領し
攜酒重相看 酒を携へて重ねて相看る
自愧無鮭菜 自ら愧づ鮭菜無きを
空煩卸馬鞍 空しく煩はす馬鞍を卸すを
移樽勸山簡 樽を移して山簡に勧む
頭白恐風寒 頭白恐らくは風寒からん
という。鮭菜は、酒の肴。ちなみに、130「韋七賛善に贈る」詩の詳解に「鮭、

音註。呉人、魚菜の総称を謂ふ」と。

御史は風霜の任で、不法を彈劾し、威勢凜然としており、それゆえ「霜威」と称する。「狐威」の字は、「狐が虎の威を假る」のに基づく。「霜威」が人を「促」すというのは、もとより俗見であって、それゆえ「戯れに仮る」という。晋の「山簡」が襄陽を治めた。習氏は荆州の豪族で、けっこうな園池を有していた。山簡は外出するたびに多く池のほとりにゆき酒を飲んで、酔うとかえってきた。曰く、ここはわしの高陽池だ。これは戯れに御史の威厳を借りて、「高使君」をひっぱたいてきて、一緒に酔ってからお帰りなさい、どうか百花潭のほとりの遊興を「習池」のそれに擬えてほしいと言うのである。結句は暗に起句と相応じており、やはり人に屈しない意がみえてくる。「成」字は、「屢しば許す」に対してこれを用いる。言ったことを実行して約束を果たすよう求めているのである。本集ではこの次に「王竟に酒を携ふ、高も亦た同じく過る。共に寒字を用ふ」と題する五言律詩がある。

040 望野

此蓋寶應元年^(注1)作。傷^ニ吐蕃猖獗^ヲ、蜀中屢^ニ擾^ル。以^ニ目中所^ニ見^ル、寫^ニ胸中所^ニ懷^ル、故^ニ題^{シテ}望野^ヲ。言^ニ所^ニ望^ニ野色^ト也。一作^ニ野望^ト、非^ニナリ。猶^ニ下^ニ方書^ニ治^ニ藥^ヲ浸^ニ酒^ニ與^ニ酒浸^ニ之^ト異^{ナル}也。吐蕃^ハ西南夷、即今之吐魯蕃。與^ニ蜀接^ニ壤^ヲ、故^ニ數^ニ入寇^ス。

(注1) 顧宸「註解」に「黃鶴が曰く、公、宝應元年四月を以て、嚴武を送つて綿州に至り、遂に梓州に入る。秋、家を擧げて梓に往く。此れ必ず未だ綿を去らず、時に成都に在つて作るなり」と。宇都宮遼庵の増広本にも引く。

(注2) 錢注(卷十二)及び輯註(卷八)は、「野望」に作る。顧宸「註解」、「唐詩貫珠」(卷三十八、登眺)も同じ。なお、「唐詩選」(卷五)は「望野」に作る。

(注3) 医術書。具体的に何を指すのか、不明。

（注4） トルファン。明清時代の呼称。

これはけだし宝応元年（七六二）の作。吐蕃が我がもの顔に暴れ回って、蜀中がしばしば乱れたのを傷み、目のあたりにした風景によって胸中の懷いを写した。それゆえ題して「野を望む」という。望見した郊野の景色を言う。一に「野望」に作るのは、よくない。医術書に薬を治めるのに酒に浸すのと酒浸しとが異なっているようなものだ。吐蕃は西南夷で、今の吐魯蕃にほかならない。蜀と境を接しており、それゆえしばしば入寇した。

西山ノ白雪三城ノ戌 南浦清江萬里橋

西山在蜀西陲、一名雪山。西山ノ白雪ハ、蓋會シテ其意ヲ而合セ言之（注7）。見西望皚皚、使二人ヲシテ凜然（注8）。三城ハ即松維保三州、當吐蕃之要衝。築城置戍以備寇。蜀江在成都城南、故曰南浦。萬里橋架之、即赴中原之路也。起句西望悲邊害、無已コト、思戍兵之勞。次句南望思歸、有殷勤驛西路此去赴長安之感。蓋野望之際、遠則西山三城列戌、近則南浦萬里大橋、矚目所觸、皆以感時傷別之事已。

（注5） 「城」字、錢注は「奇」に作り、「一」に城に作り、「一」に年に作る」と。

（注6） 薛益「分類」（卷二、眺望）に「西山は、即ち雪山。又た雪嶺と名づく。成都の西に在り。本と唐の維州、今の威州、是れなり」と。宇都宮遼庵の増広本にも引く。「唐詩貫珠」には「成都志」を挙げて「西山は、即ち雪山。亦た雪嶺と名づく。成都の西に在り。本と唐の維州、今の威州、是れなり」と。ちなみに、杜甫には「西山」と題する三首（詳註卷十二）があり、其二に「辛苦す三城の戌、長防す万里の秋」と詠ずる。

（注7） 明・徐師曾「文体明辨」卷十五に、この詩を載せ、「雪山は成都の西に在り、故に西山と称す。此に西山白雪と云ふは、蓋し其の意を会して之を言ふなり」と注する。

（注8） 『唐詩貫珠』に「蔡夢弼注に、西山三城は松・維・保三州を謂ふ。吐蕃に当たる要衝」と。但し、釈大典「唐詩解頤」には「西山に三城の列戌有り、以て辺害に備ふ。松・維・保と謂ふ者は非なり」と注する。松州は、今の四川省松潘県。維州は四川省理県東北。保州は四川省理県北。列

戌は、一連なりの陣地。

（注9） 中唐の李益「幽州にて詩を賦し意を見はす」詩（『唐詩選』卷六）に、

征戌在桑乾 征戌 桑乾に在り
年年薊水寒 年年 薊水寒し

殷勤驛西路 殷勤に驛西の路

此去赴長安 此を去つて長安に赴かん

* 殷勤は、唐代の俗語で、ねんごろに頼む。

（注10） 薛益「分類」に「言ふところは野を望む際、遠くは則ち西山を見、近くは則ち南浦を見る。因つて嘆ず」云々と。『文体明辨』や顧宸「註解」もほぼ同様の注。

「西山」は、蜀の西陲にあり、一名、雪山。「西山の白雪」は、けだしその意を合わせてこれを言う。西のかた望めば白く輝いて人を凜然たらしむのが見てとれる。「三城」は、即ち松・維・保の三州で、吐蕃に当たる要衝。城を築き守備兵を置いて侵入に備えている。蜀の江は成都の城南にあるので、「南浦」という。万里橋が架っており、中原に赴く路にほかならない。起句は西のかたを望んで辺境の侵害がやむことのないのを悲しみ、守備兵の労苦を思っている。次句は南のかたを望んで故郷に帰らんことを思い、「殷勤に驛西の路、此を去つて長安に赴かん」といった感がある。けだし郊野に望見した際に、遠くは「西山」に「三城」の一連なりの「戌」が、近くは「南浦」に「万里」の大「橋」が見え、目に触れたものすべてが時世に感じ別離を傷む事柄であるのだ。

海内風塵諸弟隔 天涯涕淚一身遙

風塵ハ言兵亂。公有「四弟」、故曰「諸弟」。此承「三城ノ戌」曰「海内風塵」、不止「蜀中」矣。下句承「萬里橋」、望郷之情、泣

自弔也。一聯言因「寰宇擾亂」、與「骨肉」隔絶、孤身索莫、各自天涯、悵望悵悵、惟有揮淚耳。

（注11） 風塵の語義については、訳注稿四、022「至日興を遣る、北省の旧閣老・両院の故人に奉寄す」二首の其一の（注33）参照。

(注12) 訳注稿(五) 024「別れを恨む」詩の詳解に「公、四弟有り、穎・観・豊・占と曰ふ」とあり、その(注20)参照。

《風塵》は、兵乱を言う。公には四人の弟がいるので、《諸弟》という。これは《三城の戍》を承けている。《海内風塵》というのは、ただ蜀中だけではないのだ。下句は《万里橋》を承け、望郷の情に涙し自ら弔むのである。この一聯の意味は、天下が乱れているため、肉親と隔絶し、孤身索漠として、それぞれ《天涯》にあり、憂わしく眺めて悲しみいたみ、ただ《涙》を落とすばかりだ、ということである。

唯將遲暮供多病^二 未^レ有^二涓埃^一答^二聖朝^一

※遲暮：オイホレ 涓埃：ホコリホトモ

遲暮ハ猶言老衰^一。楚辭^二恐美人之遲暮^一、是其出處。故^二有^二顧影^一自惜之意^一。供ハ猶言委^一也。涓ハ小流滴也。埃ハ塵也。謙言^二甚少^一。猶云^二二尺寸^一也。答ハ酬報也。前聯ハ思家ヲ、此則思國ヲ、蓋此生老衰、夙志蹉跎、男兒七尺之軀、徒^二供^二シテ病^一度^二日^一、無^二復^二有^二能^一爲^一。昔雖^二通^二籍^一朝廷^一、忝備^二近侍之官^一、未^レ嘗^二有^二三寸之功^一報^二答^二聖主之恩^一、不^レ勝^二遺憾之至^一。竊^二慙愧^一自嘆也。夫以^二稷契輩^一人^二而使^レ老^一棄^二閑曠^一、非^二唯^二不^レ形^一怨望^一、且^レ惓惓^二如此^一、忠厚之至也。遲暮涓埃虛實對、亦曰^二輕重對^一。

(注13) 『楚辭』離騷。

(注14) 宇都宮遼庵の詳説に「涓ハ字書ニ圭淵ノ切、小流滴也」と。『字彙』に「涓、圭淵の切。音錫。小流滴なり」とあるのに基づく。

(注15) 清・沈德潛「杜詩偶評」(巻四)に「前半は家を思ひ、後半は国を思ふ」と。

(注16) 例えば、西晋・陸機「挽歌」三首の其二(『文選』巻二十八)に「昔は七尺の軀爲り、今は灰と塵とに成る」と。

(注17) 訳注稿(三)、「省中の院壁に題す」詩、(注31)参照。

(注18) 『漢書』劉向伝に「忠臣明敏に在りとも、猶ほ君を忘れず、惓惓の義なり」と。顔師古の注に「惓惓は、忠謹の意。惓、読みて拳と同じ」と。

(注19) 『夜航詩話』巻二に「虚実對、或いは輕重對と謂ふ。亦た板を避くる活手段なり」といひ、杜甫「屏跡」三首其二の領聯「桑麻雨露深、燕雀半ば生成す」の句について、元・方回「瀛奎律髓」巻二十六、變体類に「雨は自ら露に對し、生は自ら成に對す。是れ輕重各對の法なり」というのを挙げて、「此の説之を得たり。蓋し、亦た就句對の類にして唐人多く之を用ふ。詩家の常例なり」といふ。

《遲暮》は、老衰とほぼ同じ。『楚辭』に「美人の遲暮を恐る」とあり、これがその出處。それゆえ影を顧みて自ら惜しむ意がある。《供》は、委というのとほぼ同じ。《涓》は、小流の滴ることである。《埃》は、塵である。謙遜してはなはだ少いことを言う。尺寸というのとほぼ同じ。《答》は、酬報である。前聯は家を思い、ここでは国を思う。けだしこの身は老衰し、かねてよりの志は蹉跎してまもなく、男兒七尺の軀を徒らに《病》に《供》して日を過ごし、何らなすことがない。昔は朝廷に籍を置き、忝くも近侍の官に備えられてはいたが、これまで聖主の恩に報い答えるのに尺寸の功績もなく、遺憾の至りにたえない。ひそかに慙愧して自ら嘆ずるのである。そもそも稷や契のような人でありながら閑曠の境涯に年老いたまま棄ておかれても、怨望をあからさまにしないばかりでなく、そのうえ真心を尽くすことがかかる具合であるのは、忠厚の至りである。《遲暮》と《涓埃》とは虚実對。輕重對ともいう。

跨^二馬^一出^二郊^一時^二極^一目^一 不^レ堪^二人事^一日^二蕭條^一

※出郊：ノガケ 人事：ヨノサマ 蕭條：サビシ

時^二吐蕃之禍^一、蜀中大^二擾^一。兵戎頻繁、繇役無^レ已^一、蒼生疲敝、日甚^二一日^一。聊欲^二出^二郊^一散^二懷^一、而原野蕭條、滿目慘然、適^二以增^二感傷^一耳。公好^二馬^一、偶騎^二出^二而觸^一此感^一也。朱鶴齡云、按^二史^一是時分^二劍南道^一爲^二兩節度^一、置^二西山三城^一列戍^一。百姓疲^二於調役^一。高適嘗^二上^二疏^一論^二之^一。朝廷不^レ納。公詩應^二爲^一此力作^一。故^二有^二人事蕭條之嘆^一。明年吐蕃果^二陷^二京師^一、西山^一諸州皆沒^一。

〔注20〕 薛益「分類」に「聊か郊に出てて懷を散ぜんと欲すれば、眼中人事日に蕭条たるを見て、適に以て其の感傷を増す耳」と。

〔注21〕 後漢・班固の「西都の賦」（『文選』巻一）に「原野蕭条として、目四裔を極む」と。

〔注22〕 輯註に見える。宇都宮遷庵の増広本にも引く。『新唐書』巻一四三、高適伝に「始め上皇東還し、劍南を分かちて両節度と為し、百姓調度に弊す。而して西山の三城戍を列す」と。

〔注23〕 邵傳「集解」に「明年、吐蕃果たして京師を陥る、西山の諸州皆没す」と。薛益「分類」も同じ。

時に吐蕃の禍があり、蜀中は大いに乱れた。戦乱が頻繁に起こり、徭役はやむことなく、民人の疲弊は、日に日にひどくなつた。ちよつと郊外に出て憂さ晴らしをしようとしたが、原野はへ蕭条として、見渡すかぎり惨然たるありさまで、まさに感傷を増すばかりだ。公は馬が好きで偶たま野駢けして、この感に感傷を増すばかりだ。公が云う、「史書を按ずるに、この時、劍南道を分けて二つの節度使とし、西山三城の列戍を置いた。民は調役に疲弊し、高適はかつて疏を上つてこのことを論じたが、朝廷は受け入れなかつた。公の詩は、きつとこのために作られたにちがいない。それゆえへ人事蕭条の嘆きがあるのだ」と。明年、吐蕃は果して京師を陥れ、西山の諸州はどれもその手に落ちた。

杜律詳解卷之上

前稿補訂

『杜律詳解』訳注稿(二)（『文化情報学部紀要』第一巻）

52頁上段6行 物事にこだわらず。↓物事にこだわらず、

『杜律詳解』訳注稿(三)（『文化情報学部紀要』第二巻）

159頁下段23行 相憶ふて↓相憶うて

『杜律詳解』訳注稿(四)（『文化情報学部紀要』第三巻）

154頁上段22行 訳注稿(三)、008の〔注23〕参照↓訳注稿(三)、008の〔注27〕参照
『杜律詳解』訳注稿(四)（『文化情報学部紀要』第四巻）

131頁上段3行 兩詔容↓兩昭容

135頁上段11行 とてもは難儀で↓とても難儀で

136頁上段7行 貞亨三年↓貞亨三年

148頁上段18行 昭烈廟↓昭烈廟

149頁下段13行 『蜀都雜抄』の↓『蜀都雜抄』を引いて

154頁上段24行 「クゴメメシ」↓「クロゴメメシ」

155頁上段1行 自ラ転陥シテ↓自ラ転陥シテ

今回、訳注を施すにあたって、東陽が目録し参考にした書籍の一つに明・徐師曾の編纂にかかる『文体明弁』があることに気がついた。そこで、改めて前稿を見直すと、例えば、訳注稿(三)、008「奉和賈舍人早朝大明宮詩の詳解に見える「漏貯水定時刻之器」、同じく012「曲江」二首其二の「始言一片、次言万点、終言欲尽。三句相承、由浅入深也」、訳注稿(四)、028「蜀相」詩の「官家織錦之処、故名。如銅官塩官之類」などは、いずれも『文体明弁』巻十五に見えるのをそのまま踏襲した注であることがわかったので、ここに補足しておきたい。ちなみに、『文体明弁』には寛文六年（一六六六）刊の和刻本がある。

それから、訳注稿(四)、026「堂成」詩の詳解に見える「化境」の語（143頁上段24行）について、〔注25〕で「もとは仏教語。靈妙で及びがたい境界をいう」として清の王士禛「香祖筆記」巻八の一節を引いたが、神田博士の『書禪室隨筆講義』（『神田喜一郎全集IV』、同朋舎、一九九〇年）の第八則に、明の胡應麟「詩數」（内篇、近体七言）に見えるのを挙げておられる。それに拠れば、化とは「神動いて天随ひ、心の欲するところに従ふ」もので、そういう境地が「化境」であるという。このことも、付け加えておく。

なお、訳注稿(四)の誤記誤植については、杉下元明氏からもご指摘いただいた。

（二〇〇五・一〇・二三初稿）
（二〇〇五・一二・一一補筆）

にのみや・としひろ／文化情報学部教授
E-mail: ninomiya@sugiyama-u.ac.jp